
このハーレム男がっ！！！！

雲間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このハーレム男がつ!!!

【Nコード】

N9166T

【作者名】

雲間

【あらすじ】

「あなたのことが好きです。愛しています。あなたの何もかもが美しく愛らしい。どうか、この私と結婚してくれませんか」

「……だ、誰が初対面のあんたとするかコノヤロオオオオオオオオオオ!!!」

学校行っていたと思ったら、突然神殿つばいところに。目の前にはイケメンがいて、いきなり求婚してきました……。ええと、頭大丈夫ですか？ 妙なところをツツコミまくるのんきな女の子と、ハーレムにならざるおえなかった勇者とのドタバタコメディ？ ツンデ

レヤンデレ男前猫かぶりやらハーレム集団が濃いです。

前編

「あなたのことが好きです。愛しています。あなたの何もかもが美しく愛らしい。どうか、この私と結婚してくださいませんか」

「……だ、誰が初対面のあんたとするかコノヤロオオオオオオオオオオ！！！」

私、鹿島 美夜。ピチピチ……の16歳。何故か初対面の金髪青目の二次元にいそいな、典型的イケメンに求婚されました。何故ですか。

ことの始まりってなんだったんでしょうか。私にはさっぱり分かりません。

私は普通に学校に登校していた只の高校1年生です。特に何か取り柄があるってわけでもありません。

そんな普通の私が、いきなり光に包まれたかと思うと、なんか大層神秘的な神殿にいたんですよ。しかも、祭壇っぽい一段高いところに。多分神殿の奥に位置してるんじゃないんでしょうか。私とは正反対の場所に扉があります。

神殿とかひえええええじゃないですか、なんですか。目の前には、お前アニメから出てきた人だろってくらいの、綺麗な顔に引き締まった体、宝石いれてんだろと言いたくなる輝きをした瞳、髪の毛は金の輝きを放っている人がいた。

着てる服は青で纏められた、明らかに上質な布を使ってる剣士様って格好。赤いマントと伝説の剣としか思えないの付き。

……見惚れないわけがないじゃないですか。

漫画から飛び出してきました！ ああ、納得！ で終わらせられる美貌ですよ？ 見惚れないなんて無理です。

あれですよ、美しい絵を鑑賞している気分です。んでぼけーっと見つめてたんですよ。そしたら冒頭に戻るって訳です。

いやあね、いくら美形だからってやっていい事と悪い事はありませんよ？ 分かります？ 私とこの人、初対面ですからね？ 私見覚えなんかありませんよ？

考えてみてくださいよ、日本で育った普通の学生が、外人と出会うのさえ、そんなにないんです。

会ってたら覚えてますよ、こんな美形。だから会ってたとかそういう線はなしです！

「突然お呼び出して申し訳ありません。しかし、私はあなたに会いたかった」

「……は？ いや、だから初対面ですよね？」

……本当になんなんですか、この人。電波か、電波なのか！？

美形で電波とか残念なイケメンだな！！ 妙に恍惚としながら話してくるし……。

美形イコール何処か残念っていう法則なんですかね？

「はい、確かに私とあなたは初対面です」

「あ、よかった。そうですよね」

少なくともメルヘンな頭ではなかったらしい。そこはよかったというかなんというか……。いや、まだ何の問題の解決にはなっていないですけどね！？

なに初対面でいきなり求婚してきてるんだって話ですよ！！

「申し遅れました。私の名前はハルトムート・シュレイヴァーンと申します。美しい人、あなたのお名前は？」

「うとうとう、美しくないですよっ！ ええっと、しゅ、しゅれば、……ハルトムート、さん？ と比べたら天と地の差ってやつですよ！！ 何を言っているんですかあなたは！！」

苗字長くて言いづらいよ！！ 名前で呼ぶしかないじゃない！！ 後、私より綺麗な人はなんぼでもいるでしょうに！！ それに、私は普通の顔であつて、美しくも可愛くもない顔ですよ！ 自他共に平均的な日本人顔ですもの！

というか私より綺麗なあんたには言われたくない言葉です！！ ええー！！

「……つて、なに顔赤く染めてるんですか！！」

イケメンがそんなことしたら、なんか可愛い……じゃなくて！！

「い、いえ、あなたに名前を呼んで頂けたのが嬉しく……」

「そ、そんなことで嬉しくならぬでくださいっ！！」

うああああああ、なんなのこのイケメン……！！ 初々しいにも程がありますよ！ やっぱかわいい……げふげふ。そうじゃない、そうじゃないわ美夜。

今の問題はそこじゃないでしょうと、何度言えば分かるのかしら美夜！

「ちよ、ちよっと待ってください、ハルトムートさん。あのですね、私達、初対面ですよ。なのいきなり結婚だどうの言われても困るわけですよ」

「……すみません。冷静に考えれば、あなたの仰る通りです」

申し訳なさそうな表情をして、私に謝ってくる。わ、分かればいいんですよ、分かれば！

あぶぶぶぶぶぶ……、こんなイケメンに謝られるのはなんか、うん、逆にこつちが申し訳なくなってくるわ……。

「あなたをお呼び立てしたのは、私の真に愛せる人を見つける為なのです」

「……はい？」

その後、色々事情を話してもらった。ハルトムートさんの話を要約するとこう。

まず、ハルトムートさんの職業(?)は勇者。や、確かに勇者と言われればそれっぽいです。それが王国の騎士様って感じですし！元々、ラムフォっていう神様から信託があって、ハルトムートさんが勇者であることが予言されてたらしい。それで、小さい頃から勇者としての訓練うんぬんかんぬんをやってたとか。

神様いるんですか……。流石異世界ってやつですね。ああ！ここ、地球じゃなくて『ラムフォラス』っていう世界らしいです。神様の名前からまんまとってるのか……。適当な。

まあ、異世界とかじゃなかったら、私がいきなりこんなところに来た説明がつかないというか……。っと、話し戻しますね。

んで、勇者として魔王を倒しに行つて見事倒したんだそうですね！いやー、すごいですよね！流石勇者様ってやつです。かつこいい！あ、いや、だから照れないで下さい。ハルトムートさん絶対褒め慣れてるでしょうに！！

……おほん。見事世界を救ったハルトムートさんは、子供のいない王様の養子になることになり、いずれは王位をつぐそうな……。ひええええ、ていうことは今は王子様！？ おおお、恐多い……。

ここからが本題だそうな。いずれは王位を継ぐことになるハルトムートさん。となると、結婚話が出てくるわけで……。あまたの求婚がきたらしいです。当然ですよー。

ハルトムートさんはかっこいいし勇者だし王様になるわけだし、超優良物件だから肉食な乙女たちが放っておかない。

選り取り見取りじゃないですか……。くっ、羨ましい！ 憎いね色男！ と、普通は思いますよね。ところが、ハルトムートさんの場合はそうもいかないそうで。

この『ラムフォラス』での勇者はある意味特別なんだそうです。勇者となる代償に、呪いがかかる。

男にとっては夢！ 一部の女にとっても夢！ な『絶対ハーレム』の呪いが必ずかかるそう……。うわぁ、羨ましい……。美女や美少女幼女はべらせ放題って……！！

と・こ・ろ・が！ 当の本人には迷惑でしかないだとか。『絶対ハーレム』の呪いは、この世界の人で愛する人を見つけることはできない、という呪いも含まれているそうなんですよ！！

そのせいで歴代勇者様は結婚もせず、独身で一生を終えてしまった人ばかり。うっわぁ……。世界を救ったのにそれって、不憫すぎるでしょう！！

ハルトムートさんも例にもれず、『絶対ハーレム』の呪いのせいで、愛する人は見つからない。けど、王となる以上はそうはいかないんですよね。跡継ぎ問題とがありますし。

なら王になるって話ですけど、『絶対ハーレム』の呪いについては、勇者以外、知ることがないとか……。知らせても、んなわけないでしょ、ってとりもつてくれない。不憫……！！

こうなってしまった以上は、どうにかしなくちゃいけないわけで、そこで私の出番なんだそうです。

『この世界の人で』愛する人を見つけれないのならば、『違う世界の人』を呼び出せばいい。

そんなわけで、ハルトムートさんが使える召喚魔法で私を呼び出したそうなの……。

「……って、そんな理由で私を呼び出したんですかー!?」

ななななな、なんですかそれは！ 私の人権まるつきり無視じゃないですか！ 確かにハルトムートさん達からすれば大問題なんでしょうけど、こっちも大問題ですからね!?

なーんで私が見ず知らずのハルトムートさんと結婚しなくちゃいけないんですか!! めったにお目にかかれたい幸運だとは思いますが……!

私には地球での生活ってのがあったんですよ!? 鹿島 美夜、人権を主張します!!

「……本当に申し訳ないとは思っております。しかし、私には諦めきれなかった。私の幼き頃からの夢を……」

「夢?」

打倒魔王!! とかじゃなくてですか? あ、もう終わったんですか?

「私に呪いがあると知ったその日から、叶わないと知れどもずっと想い続けました。私が愛する人を得ることを。成長するにつれ、想

いが抑えきれなくなりまして、私は冒険の傍ら異世界への扉を開くために召喚魔法を開発したのです」

そ、そんな切なそうな顔して訴えないでください……!! うっかりあなたに同情して流されそうになっちゃうじゃないですか!

だ、騙されませんか! 儂げな表情しても許せませんから! 私の人生まるごとペアになっちゃったんですからね!?

「成功するかどうか、定かではありませんでした。もしこれで失敗するようでしたら、諦めて政略結婚しようと思っていたのです。ですが、私は幸運にも、貴方と出会うことができました。……これが、愛というものなのでしょうね。あなたのことを、ずっと見ていたい。あなたと、一時も離れたくないと思うのです」

誰もが悩殺される笑みを浮かべながら、私の手をとってく、くち口付けし、し、した!! ぎゃあああああなんですかこの騎士の誓いみたいなのは!!

ははははは恥ずかしいです! もう無理! 顔が熱くてしょうがないんですけど!! 誰か助けてえええええええ!!

「ハルトムート! この私がおりながら、どういうことですか!」

「ハルトムート!! あたしのことを忘れようって魂胆かいつ!？」

「……ハルトムート、なにをしているのですか」

「ハルトムートさーまー! わたしが来たんですよ! ちゃんと出迎えしてくれなきゃ!」

「ハルトムート殿、おんしはまた、けつたいなことをしでかしたよ うじゃな」

助けを求めて扉から現れたのは、それはもう色々と厄介な方々で

した……。

中編

「ハルトムート！ 私と共にいて下さると言ったのは嘘だったので
すか！？」

「メルフィナ様。あれは安定しない国を安泰させるため、共に国へ
尽力を注ごうと、申しただけなのですが……」

いかにも貴族のお嬢様つて感じの、金髪縦ロールに豪盛な桃色の
ピンクのドレスを着た女性、メルフィナさん。ちょっと潤んだオレ
ンジ色の瞳がなんというか……、かわいい。小悪魔ですね。

もつと悪魔なのはハルトムートさんですけどね！ それは告白に
しか聞こえないですよ。勘違いしない方がおかしいです。ていうか
いい加減手、手を、手を離して下さい……！

「あんたに負けた時、ビビツときたんだ……。このアディラ様には
あんたしかいないってね。だからどこの馬の骨ともしらない女に、
あんたはやれないよ！」

鋭い視線で私を睨むのは、女丈夫の女戦士といった風貌のアディ
ラさん。赤く燃えるようなポニーテールにした髪の毛と瞳が、アデ
イラさんの格好良さをプラスしてる。おねえさま、いえ、姐さんっ
て呼んでもいいですか。姐さんなら私そっちの道にいつちやいそ
うです。

あの、さつきより手を掴んでいる力強くなってるんですけどハルト
ムートさん。地味に痛いです。離してくださいと言っているでしょ
うに……！

「今まで貴方が研究していたのはその方を呼ぶ為ですか。……こんなに近くに私がいるのにそれを貴方はいつまでもいつまでもそうやって私を見ないで他人ばかり見てこんな私に尽くしているのになんか貴方は気がつかないんですかそうやって私の気をひこうという意図なのでですか分かりません私はこんなにも貴方の役に立とうとしているのにもあもしかして役に立っていないからそういうことをしようとするのですね私が至らないから貴方に相応しくないから使えないからだから貴方はその」

「マビア、君は十分役に立っている。事実、私は幾度も貴方に助けられた。そう自分を卑下するのはお止めなさい」

黒の三角帽子に、黒いローブ、紅紫の髪に目の魔女っ子マビアさん。や、ヤンデレってませんか……？ 目が若干……いえ、相当逝ってます。しかしヤンデレまで惹きつけるだなんて、流石ハーレム補正。

……だから離して下さいと何度言えば分かるのですかハルトムトさん！ ずっと繋いだままは恥ずかしいんですってば！

「ハルトムトさま！ リーナのこと、忘れちゃったんですかあ？ わたし、ハルトムトさまのお嫁さんになりたいなあ〜って、何度も言っただじゃないですかあ〜。こんな乙女が誘惑してるのになんか……！」

「リーリナ様には婚約者がいらっしやいます。私のような者に、そのようなお言葉をかけられるのは、おやめ下さい」

それを自分で言っちゃあお終いですよ、リーリナさん。ロリッロリな白のドレスにかかる珊瑚色の髪の毛、まん丸いワインレッドの瞳。所謂カワイイ系。可愛いには可愛いんですけど、自分で言っち

や駄目ですよ、ええ。ていうか婚約者いるのにハルトムートさん口説いているんですか……!!

……ですからね！嫉妬の目が恐怖でしかないので離していただきたいんですよ、ハルトムートさん！

「ほうほう、これまた随分とおかしな娘を選んだの、ハルトムート殿。だかの、わらわは負けんぞー」

見た目は子供、頭脳は大人！その名もめいた……ごほごほ。その名も……つて、名前が分からん。ハルトムートさん、この子供なように子供じゃないヨローロッパの巫女さんっぽいお方は、なんと！いうお名前なんでしょうか。薄めの金髪に金の瞳が神々しくてたまらないです。教えてくれたら、手、もうこのまんまでいいです、諦めます……。意外と強情さんですね、ハルトムートさん。ふむふむ……。ロルシャーエちゃん、じゃなくて、ロルシャーエさん？

「ロルシャーエでよいぞ、恋敵殿」

「ここここ恋敵ってなんですか！わ、私、ハルトムートさんが好きとか言っていないですよ!？」

「あなたにハルトムートが求婚している時点で恋敵には変わりありませんわ!」

ど、どうしてそうなるんですか！大体、まだ初対面で、ハルトムートさんのこと全然知らないのに、好きになるとか……ないですから。一目惚れとかもしてませんからね！

半泣きになりつつ否定していると、握られていた手に、ハルトムートさんのもう片方の手が追加される。なにしてんですかって思っ、ハルトムートさんを見ると。

「……あの、露骨に残念がらないでくれませんか、ハルトムートさん。残念がつてる様も非常に美しいとは思いますが、目に毒です。私の身がもたないんですよ」

「私を目に入れると、貴方は亡くなられてしまうのですか？……！？」

ピッシャーン！ 雷が落ちましたっ！ って表情で私を見てくる。いやいやいやいや、どうしてそうなるんですか。真に受けられないですよ！ ほんのジョークですよ、ジョーク。

「あなたが亡くなられるのは、私にとって一番辛いこととなりましよう。……私はあなたの視界に入らぬようにします。ようやく見つけた愛する人を、失いたくはありません」

「じよ、ジョークですってば！ 冗談！ ハルトムートさんを見るくらいで私は死にはしません！ ただドキドキしちゃうだけです！」

「まあー、同意できますわあゝ。ハルトムートさまを見てると、ドキドキがとまりませんものお」

リーリナさん、それは恋のドキドキで、私のドキドキは大物を前にする時の、緊張するドキドキなんですよ。同じではないです、ええ。断じて違います。

だからハルトムートさんは顔を赤くしないでください！！ っただけウブなんですか。私もう、あなたのことがっこいいじゃなくて、可愛いとしか認識できなくなってきましたよ。

「どうしてハルトムートに好意を持っていないというのにあなたが選ばれるのですか一番ハルトムートを愛しているのは私だというのに生まれてからずっと私はハルトムートのために生きてきたそれ以外の為に私は生きたことはない私の全てはハルトムートのもので

捧げたのにどうしてこんな女を選ぶのですか理解出来ない理解出来ない私の愛が足りなかったからそっちに心が行ってしまったのですね私があまりにも弱いから心もとないから美しくないから可愛くないから隣に立たせられるほどの面じゃないから権力ないから気持ち悪いが

「マビア！ 自分を貶めるのもいい加減になさい」

ヤンデレヤンデレ言ってたけど、実際にいるとめんどくさい人なんですわ……。ハルトムートさんが苦い表情で辟易してる。少し意外。てつきり軽いなす人かと思ってたんですけど。勇者様も、色々と苦労なさっているんですね……。勇者っていうと、なんでもできる完璧超人っていうイメージですわ。

「ぐたぐた行っていないで勝負だよ、恋敵さん！ あたしに勝つたら潔く諦めてやる。但し、負けた時はどこかに消えてもらおうじゃないか」

勇ましいです姐さん。そんじよそこの男より男らしくって素敵です。ああ、私はアディラさんの嫁になりたい……。でも、勝負ってなんですか。私アディラさんのような、戦う力なんて1ミリもないんですけど……。戦ったとしても、一発KOです。

「アディラ殿、それはちと厳しい物があるの。恋敵殿は見たところ、何も力を持っていないようじゃからな」

巫女さんパワーで分かるのですか。まあ、確かに私は平々凡々な人生と体ですけど。特になにかあるわけでもない普通の人間ってことで通ってますし。……平凡オーラでもでているんですね。

「あ、その前に、恋敵、恋敵って呼ぶのやめてくれませんか……？」

私、鹿島 美夜っていう名前があるので。あ、こっちでいうと、ミヤ・カシマですね」

「ミヤ、と仰るのですか？ 神秘的で可憐な名前です。貴方にこそ相応しい名だ」

「ほ、褒め殺したってそうはいきませんからね！！ なにもなりませんからね！！」

輝かしい笑顔を私に向けるハルトムートさん。も、もうイケメン過剰摂取で私は死ぬ、死にます……！！ ドキがムネムネ！ あ、胸がドキドキ！ こっちが恥ずかしくて死にそうです！ 繋いでる手も熱くてしょうがないんですが……！！

「では、どうやって決着をつけますの？ いい機会ですし、私としてもさつさとこの状態を終わらせて、ハルトムートと二人つきりで過ごしたいですわ」

ハーレム状態を、ですか。そうですね、王となる以上はお嫁さん決めなくちゃいけませんし。それ以前に、私のような不審者を迎えて大丈夫だったんですかハルトムートさん。貴族とか王族とかは、身分をかなり気にするんじゃないですか？ ……無計画？

「……そーだねえ、公平じゃないと駄目だから、アザレの花を見つける、つてのはどうだい？」

「アザレの花？」

「私が説明します、ミヤ」

ハルトムートさんの説明によると、ピノリアの花畑に、一本しか咲かない花らしい。摘みとると、また一本だけ咲くという。花畑自体、広さが半端じゃなくて、さがすのは困難極まりないとか。

「そ、そんな一本しか咲いてないんじゃない、見つけるの無理なのでは……？」

「それくらいの価値が、ハルトムートさまにはありますからあゝ」
のほほんと答えるリーリナさん。むむむむ……駄目ですね、この人嫌です。価値ってなんですか、価値って！！ハルトムートさんは人なんですからね！あーもー！もやもやする！するとハルトムートさんが、ちよつと苦笑いをしながら私を見た。

「……怒ってくださるのですか？」

「当たり前じゃないですか！ハルトムートさんは人ですよ？この国がどうか分かりませんが、人間はすべからく人権があるべきなんです！」

間違ってるかもしれないけど、私はそう思うんです。日本だけの考えだつても分かってるけど、許せないんですよ。それが私にとつての当然ですから。

「……やはり、あなたを好きになってよかった。心の底から、そう思います」

「なななななな何言ってるんですか！！ やめてください！」

嫉妬の目が怖いんですつてば……！！ほら！今も！メルフィナさんとアディラさんとマビアさんの視線がががががが。

「ほれほれ、決着を着けるのであろう？ はよう移動せぬと、日が暮れてしまつぞ」

「そうですね……行きましょう。私が使った馬車で行けばいいですわよね？」

と、あれよあれよという間に、ピノーリアの花畑に行くことにな
ってしまいました。……ちよつと待って下さい。私、参加するだ
ななんて一言も言っていないですよ……？

中編（後書き）

会話ばかり……orz

「……どうしてこんなことになったんですかね」

ピノリアの花畑に何の問題なく着きました。馬車で誰がハルトムートさんの隣に座るか、争いにはなりましたけど。結局はハルトムートさんが馬の乗って、残りは馬車になりました。

私が馬じゃ駄目だったんですかね。乗れませんが。馬車の中は牽制と殺気で、殺伐とした雰囲気でしたよ……！！ 3時間もの間それですよ？ 耐えられます？ …… ロルシャーエだけが癒やしでした。

「恋と好奇心は別じゃからな」って言って、私の世界に興味持っていたらしく、簡単に説明したんです。

……上手く説明できなくて、全然ものを知らなかったんだと思知らされました。不勉強がたたったんですね……。こ、こんなことになるなら、しっかり勉強しておくんだ……！！ あ、でも今となつては意味ない？

そうそう、問題なく着きはしたんです。着いた後が問題でした。東京ドーム一個分はあるんじゃないかって程の広さの、色とりどりの花咲く場所には、綺麗なドレスを着た人から、麻布製？ の地味な服を着た、沢山の女性が居ました。

聞いたところ、普段はいても10〜15人らしいんですけど、明らかにそれ以上いるんですね。100人はいらるんじゃないでしょうか……。

あれ？ 今のメンバーしか、決着のこと知りませんでしたよね？ 外に出てから、決着の話した覚えはないですし。

目の前の光景に圧倒されていると、メルフィナさんが声をあげた。

「じつ、これはどういうことなのですの！？ 何故こんなにも邪魔者がいるのです!？」

「あたしがみんなに広めたのさ。公平じゃないといけないんだろう？ なら、ハルトムートが好きな奴全員に伝えないと駄目じゃないか」

あ、だから出発する前にメルフィナさんの従者を脅して街に走らせただんですね！ 男前ってレベルじゃないです。漢すぎますよ……。しかし、ハーレム補正も侮れないですね。この5人だけかと思っていたら、こんなに大勢の人を魅了していただなんて。恐るべし、『絶対ハーレム』! ……まあ、100人も言い寄ってくる人がいたら、ハルトムートさんも苦労しますよね。美形には美形なりの苦労がある……。垣間見てしまったようです。

「はい、みんなよく聞け！ 目的はアザレの花！ 報酬はハルトムートの嫁！ 以上！ 勝負の始まりだよ!!」

アディラさんが威勢のいい声で、始まりの合図を告げたと思ったすぐに、女性が我先にと花畑を駆けていく。まるで狂った牛の群れ……げふんげふん。女性にそんなこと言っちゃダメじゃない美夜!! でも、あんなどたばた走りまわっていいんですかね。もしかしたらアザレの花踏んでるかもしれないのに……。

アザレの花を探しに、女性が散っていく中、未だに私はスタート地点にいた。

……さてと。私はどうしましょう。正直言って、私は参加する意味がないんですよ。だって、別にハルトムートさんと結婚したい訳ではないし、本気でハルトムートさんが好きな人達の邪魔をしたいわけでもない。

ハルトムートさんのことを本気で好きでもない私が、アザレの花を見つけてしまうだなんて、一生懸命に花をさがしている人たちに失礼極まりないですし。

だとしても、ハルトムートさん自身はどうなるんでしょうか。好きでもない人と結婚しなくちゃならない。王とか貴族とかは政略結婚ってことであり得る話なんでしょうけど……。幼い頃からの夢、って言われちゃうと重いじゃないですか！ 十年年もの夢ですよ？

非常に不本意ながら、ハルトムートさんの夢は私にかかっている。私がアザレの花を見つけないと、ハルトムートさんは望まない結婚をすることになってしまう。

うつうつ……私にどうしろっていうんですか……。ハルトムートさんの将来を私が握っているだなんて……。

「ミヤ」

「……ハルトムートさん」

「ミヤは探しに行かれないのですね……」

儂さが具現化しました、と言っていていいほどの微笑みを浮かべる。

や、やめてください！ 私が悪者みたいじゃないですか！ それも運命ならば……。みたいな感じで受け入れようとしなくてください！！ と、とりあえず話題を逸らそう！

「ああああ、あのですね。そもそもアザレの花自体を知らないの、探そうにも探せないといえますか……」

「そういえば、そうでしたね。申し訳ありません。アザレの花は、淡いピンク色で5枚の花びらをもっています。普通の花より一際小さな花ですので、見つけるのは至難となっています」

普通の花より小さいって、もっと見つけるのが難しいのでは……？
大きくて目立つ花だったら見つけられるだろうけど、背丈が小さいと他の花にまぎれて、絶対に見つけられないと思うんですよ……。

何故そんな無謀ともいえるのを、条件としたんでしょうかアディラさん。そしてみなさん賛同したのは何故なんでしょうか……。アディラさんはその方が燃えるだろう！ って言う気がしますけど。

「……とりあえず、探してみますね」

「ええ、……お気をつけて」

足元に咲く花を見ながら、歩き始める。探すふりっていつかなんといえますか……。じーっとしていられないんですよ。

ハルトムートさんの願いもある。女性たちの想いもある。どちらも重くて、私はそんな責任を背負いたくない。投げ出してしまえればどんなによかったことか。

……なんで私、ここにいるんでしょう。そ、そもそもあれです！
普通にも程のある私なんか召喚しちゃったのが、ハルトムートさんの運の尽きだったんですよ！ ガッツリ肉食系女子だったら速攻結婚ウエディング！ ハッピーエンド！ いつまでもいつまでも幸せに暮らしましたとさ、ちゃんちゃん。だったでしょうに。

「ほんと、なんで私だったんですかね……」

「おんしだったからじゃろうな」

「あれ？ ロルシャーエ。どうしてここに？」

「追ってきたのじゃよ」

何か企んでる笑みのロルシャーエ。な、なんですか悪役みたいな

笑顔！ ちょっと怖いですよ！ 怯える私に、ロルシャーエは一回噴いてから、大声で笑った。え、何、何事！？

「心配じゃのー。実直すぎるのも考えものじゃな。……ま、変なところで悩んだらうだかのう」

「な、何？」

「今ぐらい素直になったほうがよいぞ。その内できなくなるからの大丈夫じゃ。おんしなら出来るとわらわは信じとるぞー」

「……どうして私なんですか」

ロルシャーエは簡単に言っただけだ。……鈍感じゃないから言われていることくらい分かる。よく「美夜の感情はわかりやすいね」っていわれるし。ごちゃごちゃ悩むな素直に行けって言われているのも分かる。でも、でもやっぱ、責任が重すぎやしないうか……。潰れる自身、ありますよ？

「何をそう頑なに拒むのじゃ。怖いのかえ？」

「そりゃあ怖いですよ。怖くないわけがありません。……それより、ロルシャーエはいいんですか？ 私のことなんか気にして」

ロルシャーエだって、ハルトムートさんのことが好きはず。他の女性達が花を探しているのに、私なんかにかまっけていいんですかね。ハルトムートさん取られちゃいますよ？ いいんですか？

「ほほー、わらわの心配をするか。ならば問題ないぞ。わらわは一生結婚出来ぬからな。世界の為に巫女としてあらねばならぬ。わらわの身は、世界に捧げられておるのじゃ」

あ、思ったとおり巫女さんだったんですね……。巫女さんじゃなかったら、一体誰なんでしょうか。ではなくて……！

「じゃ、じゃあなんでアザレの花探しに参加してるんですか!？」
「お遊びじゃ。ほほほほほほ! 女の戦いは面白いのう! 人の隠しても隠しきれぬ欲が現れやすいからの!」

高らかに笑い声をあげるロルシャーエ。ひ、ひどいよこの人……
! ! こっちは真剣に悩んでいたのに、お気楽すぎやしませんか……
…!
力が抜けきってしまった私を見て、ロルシャーエは声色を変えて
言ってくる。

「そんな調子でやるのじゃ。それがおんしの力となり、良き道を示す。
おんしにとっても、の」

「なんですか、その含みのある言い方は」
「予言じゃ予言。巫女様のありがたい言葉じゃぞ。ほほほ、せいぜい頑張るのじゃな。……さてとの。お膳立てはしてやったのじゃ。
きつちりシメるが良いぞ、ハルトムート殿」

ちらりと私の後ろへ目線を向けてから、ロルシャーエはニヤニヤしながら去っていった。……え? 振り返ると、そこにはハルトムートさんが。い、いつの間に!

「ミヤ」

「……はい」

ハルトムートさんの真剣な雰囲気、呑まれてしまう。真っ直ぐに私を見るハルトムートさんは、……かつこよかった。可愛い可愛い言ってる、ごめんなさい。こんなに見つめられたことなくて、なんかムズムズするのであまり見ないでくれませんか……! ?

「私は早急すぎました。いきなり結婚を申し込むなど、男の風上にも置けない行為です」

女は結婚となると、将来のことも含めて考えますからね。そう単純にうなずけませんよ。将来のことを考えたら超優良物件には間違いないですけど。

「ですから、ミヤには徐々に私のことを知っていたいただきたい。私も、ミヤのことを知っていきたい。ええつと……、と、友達から始めませんか？」

……友達？

「ぶ、う、あ、あは、あはははははははははは！　ハルトムートさん、友達からって！！　絶対誰かに教えられたんですよね！？　な、なんか似合わない言い方……！！」

今までお堅い感じでいつてたのに、急にフレンドリーというか、ハルトムートさんらしくない言い方に爆笑してしまった。絶対口ルシャーエあたりに仕込まれたとは思えない……！！

笑い転げていると、ハルトムートさんが落ち込んだ様子でぼそりとつぶやいた。

「だっ、駄目、なのでしょいか」

「そうじゃなくてですね、あは、はははっ、いいです、いいんです

！　はい！　お友達から始めましょう！」

ああもー、馬鹿らしいですね！　あれこれ悩んでても仕方ない、か。

大体私はハルトムートさんの為に呼ばれたんだし、今、この世界

で頼れるのはハルトムートさんしかいないですし！ 私は、ハルトムートさんの力になりたい。ハルトムートさんの側で、ちよつとづつ頑張つていけばいいですよ！ ……結婚どうのはさておき。

「……あ、でも、アザレの花はどうするんですか？ 見つけておかないと、ハルトムートさん結婚することになつちやいますよ？」

「心配いりません。……ミヤ、手を出して頂けますか？」

素直に右手を出すと、手のひらに一輪の小さな花を渡された。……ん？

「あ、れ？ は、ハルトムートさん、これって」

「アザレの花です。ミヤが探しに行った後、見つけました」

ゆ、勇者補正ですか……？ 簡単に見つけちゃっているんですけど……。ていうか、ハルトムートさんが見つけてよかったんですか！？ 女性が見つけなくちゃいけないとか、そういうのではないんですね！？ はー……、裏をかかれましたね、私達。ハルトムートさんが見つけちゃいけないって言うてはいませんし。

ハルトムートさんの説明通り、アザレの花は小さい。あれです、結婚式のブーケに入ってる小さい花……なんだっけ、えーっと、カスミソウー！ カスミソウに似ているんだ！ アザレの花は一輪咲きだけだ。

「今すぐ、結婚して欲しいとは言いません。あなたの気持ちがあんな形であれ定まりましたら、私に言うて頂きたい」

「はい。……必ず」

ハルトムートさんは、私のしたいようにすればいい、と言ってくれた。結婚しない、という道を選んだとしても、ハルトムートさん

は頷いてくれるだろう。そ、そこはこう、強引に「俺とずっと一緒に入れてくれ！」とか言ってくれた方が、乙女心をくくすぐられるといえますか……。いてもいいんじゃないかなって気になりそうなのに。ハルトムートさんではありえないでしょうけど。

とにかく、決めたら必ずハルトムートさんには言おう。どんな風にしたいと決めても。それが、ハルトムートさんに対する私のなりの誠意。

「決まったようじゃの」

「ロルシャーエー!? どこかに行ったんじゃないんですか!?!」

「わらわはずっと見ておったぞ?」

な、な、な!! 見てたんですか!! そこは、後は若いお二人で……。とかじゃないんですか!? 見合いじゃないけど。出歯亀はいけないですよ!

「おんし案外ノリ気じゃの。さてさて皆の衆! 聞こえておるかえ? アザレの花はハルトムート殿が見つけたぞ。解散じゃ解散。ハルトムートはミヤに渡してしもうたからのー」

「もう、駄目なのですか」

急激に周囲の温度が下がった。近くにはうつむきながらぶつぶつと呟くマビアさんがいる。マビアさんの足元の花は、黒く染まったかと思うと萎れていった。歩けば歩くほど、黒いのが広がって花は彩りを失っていく。

な、なんですか、この悪の波動みたいなの……。薄暗い霧まで発生してますし、あ、危ないんじゃないんですか!?!

怖くなって近くにいたハルトムートさんの腕を左手で掴むと、霧が破裂し辺りを更に暗くした。おまけに吹雪がマビアさんの周りに

としちゃった……。

「……み、ミヤ？ 貴方は一体なんてことを……」

「あ、ああああああ！ ごめんなさい！ アザレの花落としちゃってごめんなさい！！」

「あ、いえ、そうではなく……」

希少な花なのに、落としちゃったりして罰当たりすぎる！ 慌てアザレの花を拾う。ほ、よかった、無事ですな。

「豪快にいったのー。そこまでのを見たのは初めてじゃ」

「え？ なにがです？」

「おんしがマビア殿をひっぱたきにいったんじゃが。……その様子じゃと、反射的にやったようじゃの」

もしかして手がジンジンするのは、マビアさんを叩いたから……！？ うわああああごめんなさいマビアさん！ 私、よく手が出ちゃうんですうううううううう！

私がマビアさんに謝り倒している中、ハルトムートさんとロルシヤーエが会話をしていた。

「ほほっ、形無しじゃのハルトムート殿」

「……仰る通りです。彼女の前ですと、私は駄目なようですね」

「精々頑張るがよいぞー」

「はい、彼女に認めてもらえるよう、精一杯努力します」

よく分からないけど、なんか不穏な感じがしますよ！？ わ、私を巻き込むのは勘弁して下さいね！！ ……ハルトムートさんの側にいると決めた以上は、巻き込まれるのは確実でしょうけど。

ぶっ倒れていたマビアさんが、幽霊のごとく起きあがってきた。

こ、怖いですよ！

「…………、ふ」

「マ、マビアさん、さっきはごめんなさい！ 不可抗力といいますが、ええと、好きでやったのではなくてですね、ああつと……」

「ふふふふ、私目が醒めました今まで私のことを正面きつて見てくれた人がいたでしょうかいえいませんでした私を面倒な奴としか見ず避けることしかない私を腫れ物のように扱って私を見ようとしてもしない理解しようとしなない私を分かってくれないだから私も理解しようとしなかつたですが今なら私は理解できる理解することができる貴方は私のことを見てくれたから私を見たからああこんなにも世界は素晴らしいのですね貴方という理解者ができるだけで私の心は澄み切った感じでいっぱいです貴方さえいれば私はどんなことでもできそうですいえできますさあ何なりと御命令を！！」

人が変わったように、ギラギラとおどろおどろしい輝きを放ちながら長ゼリフを言い切った。命、令？ え、え、え、マビアさんいきなりどうしちゃったんですか……？

「見事に次の依存対象になったの。ほほほ、よいではないか。これでおんしの当面の安全は、ある意味確保されたんじゃないぞ」
「な、なななんですかそれはっ！？」

そんなの望んでいませんって！！ 命令とか出来るような立場とかじゃないですし。私はあくまで普通の一般人なんですから、偉そうなおことはできないんですよ。小心者を舐めないでください！

「後々なるのじゃ、諦めい」

どういう意味ですか。怖いこと言わないでください！

「ミヤ、私が側にいます。共に頑張りましょう」

嬉しいけど嬉しくありませんその言葉。原因はハルトムートさんな
んですから！

こうして、ハーレムの人に怯えながら、ハルトムートさんの生
活が始まったのであった。

……お、王妃とか無理です勘弁して下さい。

とある一日（前書き）

拍手に掲載していたものに加筆修正・追加したものです。

とある一日

ひとまずハルトムートさんとは婚約、という形で落ち着きました。婚約も早すぎると思うんですけどね！？ でも、花畑騒動を犯した以上、なにもなしという訳にはいかなかったらしくって……。

そんな訳で、私は婚約者として、ハルトムートが養子に入った国の城で、贅沢な一室を与えられて過ごす日々が続いているんです。

それで、勇者であり王子でもあるハルトムートさんの婚約者なのだから、それ相応の人になれっことで、窮屈なドレス着たり、作法や礼儀やら常識を覚えたり……。

てんやわんやでひーひー言ってる日々が続いています。

今日は、そんなとある1日をおおくりしますね。

朝、起きると一番に会うのは、私の護衛になってしまったマビアさん。……相変わらずな人です。

「おはようございますミヤ私は今日という日が素晴らしくて今にでも私はミヤの為に死ぬます死んできます貴方が命令すれば私は何でもしましょう今日はあいつらになにをなさいますか暗殺ですか毒殺ですかそれとも焼き殺すのをお望みですか私としては溺死させるのも一考だと思えますさあ御命令を頂けませんか今の私はミヤの為にいるのですから」

「い、いや、私を守ってくれただけでいいから！ 間違っても殺したりとかしないでね！？ 勝手に死んだりしないでくださいよ！？」

「ああミヤはなんて優しいのですかあなたを襲う者はすべからく死すべき運命だというのにしかしそれでこそミヤなのですな他の下賤な者ならば戸惑うことなく排除を命じるでしょう分かっていますミヤが望まないということはそれでも私はひねり潰したくてたまらな

いのです貴方に悪意が向くのが私には耐えられないミヤにはミヤでいてほしいのですからいえどんな風になってもミヤはミヤですので語弊がありますねすみません私はどんなミヤでも好きだと言えますこんな私を受け入れてくれたのですからおや早速馬鹿で阿呆でどうしようもないモノがきましたねミヤを傷つけようとするとなど笑止千万というわけで私は行って参ります後私のことなど呼び捨てでいいのです私などにわざわざ敬称をつけるほどではないのですから「い、行ってらっしゃい……」

邪悪な笑みを浮かべて、マビアさ……マビアは文字通りその場から消えた。

突如現れた私に対する風当たりは強く、殺そうとする人は多いらしい。……なんか、あんまり想像つかないんですね。殺される心配なんて全くない平和な日本に住んでたんですから。

危険があるってことはハルトムートさんのハーレムで十分に分かってはいるんです。……あの殺気に私は勝てないです。その場で土下座しちゃう勢いです。

それなのに私があんなにも呑気でいられるのは、ひとえにマビアのおかげ。私があがつく前に、手早く退治してくれるからです。

政治面とかそういう難しいところは、ハルトムートさんがやってくれているらしい。らしいとしか言えないのは、私があんまり外に出てないからです！

ほ、本当にマビアがいなかったら私どうなってたんでしょうか……。責任感の強いハルトムートさんなら、なんとかしたとは思っていますけど。

マビアは強い。とにかく強い。所謂魔法使いなんだそうですけど、よくある呪文を必要とせずに魔法を使ってしまう。手足のように使うことができちゃうれしいです。

能力を買われたのもあって、ハルトムートさんの魔王討伐に同行

していたとか。

……そ、そんな凄い人に私、喧嘩売ってたのかと思うと、我ながら無謀すぎて笑えない。笑えなさ過ぎる……。

マビアとの挨拶を終えた私は朝食にはいるのでした。

*

朝食を食べ終えた私がすることは、……自室で勉強。ま、まさか異世界に来てまで勉強するとは思いませんでしたよ。ハルトムートさんが召喚する為の魔法しか研究してなかったので、元の世界に戻れない以上、ここラムフォアースのことを知っておかないといけないわけで。

泣く泣くラムフォアースの常識とか歴史とか、お勉強するしかなかったんですね……。もう勉強はこりこりだというのに！

歴史を1から覚え直しは堪えますよ……。その上、言葉は普通に通じるのに文字はさっぱり分からないんですよね。文字も一から覚えなくちゃいけないんです……！！

「これ、止まるでないぞ」

「あつっ、ごめんロルシャーエ」

閉じた扇子でバシリと頭を叩かれる。軽く叩くけど、意外と痛い。唸りつつ、止めていたペン（インクを使うやつ！）を動かす。書きづらいつたらありやしない。ラムフォアース歴159年、初の勇者誕生、世界を救う……っつと。

ここの文字はきちんとかけないので、日本語でメモメモ。その内ここでの文字で書けるようになっていないといけないんですけどね！

とにかく、今は歴史とかその他もろもろ、今はロルシャー工に教えて貰ってるんですよ。なんでもロルシャー工自ら、教師役を立候補してくれたらしい。全く知らない人より知っている人の方が安心できるから、凄く嬉しかった。

「ふむ、その調子じゃ。この国の未来の為に、おんしにはしっかり覚えてもらわないとの」

「や、いやいやいや、まだ私、結婚する気ないですからね!？」

「『まだ』ということはその気はあるようじゃな」

ニヤニヤした表情で私を見てくる。そ、そんな揚げ足とらないで下さいよ……! いや、その、可能性であって、……あああああ! 違うんです!! ううう、なんとか話題をそらさなくては!

「み、巫女ってなんですか?!? 建国以来、ずっといるようですよー!」

「ほほう、話をそらすか。まあよい。……巫女は神の声を聞き、ラムフォーラスに暮らす全ての者に伝える役目をもっておる。わらわは92代目になるの」

92代目……!?!? 日本の皇室より……は続いてないか。あれ、どうだったっけ? お、覚えてない……! あああ、やっぱり歴史は苦手……。

でも、それだけ続いているとなると、相当な歴史があっただろうな……。血を何代も絶やさないようにするだなんて、相当の努力がいるでしょうし。

「……ん? 巫女って世襲制なんですか?」

「違うぞ。巫女は死んだら転生をするのじゃ。そして前世の記憶を受け継ぎながら新たな生を受け、巫女として名乗りでる。つまり、

わらわは一代目からの記憶があるのじゃよ」

「え、ええええ!？」

道理で幼い割には大人っぽいというか、なんとというか……。大人の余裕があるというんでしょうかね。流石ファンタジー。何でもありでびっくりです。

というか、結婚できないって言ってましたね忘れてました。

「でも、大丈夫なんですか？ そんなに大量の記憶を持つちゃって

脳に沢山の記憶が入ってるって事ですよ？ 人の脳には限界があつて、どんなことでも忘れていってしまうから。なんちゃら、っていうのがあるはずなんだけど。

「前世は前世で、今は今。わらわはわらわとして、今を楽しんでおるからの。昔は関係ない。大丈夫じゃよ。心配せんでも良い。巫女の中でも特に変わり者のわらわじゃぞ？ そんなことへでもないわ」
「あー、なんか否定できません」

おもしろがつてハルトムートさん争奪戦に参加する辺りが特に！
あ、あんな修羅場に自ら飛び込むなんて、どついう神経しているんですかっ……! !

「もうこの話題は終わりじゃ。さてさて続きをしようぞ」

「……う、はい」

早くお昼ごはんが来て欲しいようなそうでないような……。
複雑な心境に駆られる私でした。

*

勉強が終わって、私に待っているのは……恐怖の昼食。え？ なんて恐怖かって？ ええ、それは凍える吹雪が舞いに舞ってるからですよ……。

「作法がなっていないせんわ。音を立てて食事をするだなんて、なんて下品なんでしょう！ 身の程が知れますわね」

「う、……気を付けます」

「まあ。この程度のことを避けられないだなんて、この先貴女はどうなるんでしょうねえ」

私を嘲笑うメルフィナさん。メルフィナさんは私に礼儀作法を教えるために来ている。

これ。これです。この嫌味ったらしい……いえ、嫌味しかない言葉をぶつけられてばかりなんですよ、昼食は。

私がおかする度にねちねちねちねちと……。そんなに私を苛めたいんですかそうですか。きつと私に教えに来たのも、私をいじめる為なんですわ分かります！

いや、分かりますけど！ 訳のわからない女が急にきて、好きな人奪つ……た？ んですし。私はその気はなかつたけれども！

あ、勿論、メルフィナさんは私に教えるのを最初は嫌がりました。でも、ハルトムートさんがお願いすると一発オツケーを出したんですよね。

そりゃ、好きな人からのお願いだったら聞きたくはなりませんけど、ねえ。ハルトムートさん、メルフィナさんに対してちよつと酷いよ。うな。と思つてた罪悪感もこのいじめでなくなりましたけどね！！

「ううう……、そ、そういえば、なんでハルトムートさん、メルフ

イナさん、ロルシャーエには、二文字目に『ル』がついてるんですか？」

「そんなことも分からないの？ 嫌ですわ、察しのつかない子は」

扇子で口元を隠し、見下した眼で私を見てくる。……この人は扇子がないと駄目なんでしょうか。ロルシャーエも持ってたし。貴族の嗜み？ ってやつなんですかね。

「いえいえ、なんとなくは分かってるんですよ。お偉いさんには必ず二文字目に『ル』がついてますよね。分かるんですけど、そのところ詳しく教えていただきたいな」と

「それならそうと始めから言えば良いのですわ。どん臭くて嫌になりますわぁ」

……この人は一々、人のことを貶さないと気が済まないんでしょうか。流石の私でもイラっときちゃいますよ。

偏見は持ちたくないんですけど、持つちゃいそうになっちゃうじやないですか！ 温厚な日本人でも腹の中はどうなってるか分からないんですからね！

メルフィナさんは貴族の中で一番偉い位の公爵家、ハルトムートさんは元公爵家の現王子様、ロルシャーエは元々は二番目に偉い侯爵家で現巫女さん。

こうしてみるとお偉いさんばかりで、本来なら私にとっては雲の上の存在なんですよ。それ以前に関わることなんてありえなかつたんですけども。

「『ル』がつく者は、建国当時に国家を設立した偉大な者の血筋をひいていることを表しますの。それ以外が二文字目に『ル』を付けるなど言語道断。即刻名前を変えさせられますわ」

「なんでまた、そんなことになっっているんですか？」
「変なことを言うのね。ここでは当然のことよ」

うづん、ここでの常識ってやつなんですネ……。よく分からないけど、納得するしかないのかな？ 郷に入れば郷に従って言いますし！

あれです、外国の文化の変な所を聞いて、なんか変だけどそこ独特のところなんだーって思うような感じで！

「わかりました！ よく分からないけどとりあえず納得しておきます！」

「そのようなことわざわざ言わなくてよろしい！！ 馬鹿ですの！？」
馬鹿なのですね！」

失礼な！ ちょっとイライラしたから八つ当たりしたただけですよ！！

*

食後の運動はきついです。お腹の中のものがげろりそうでもう私は駄目です死にますうづんうづん……。。

「なにやってるんだい！ これくらいでへこたれるようじゃ、ハルトムートはやれないねー！」

「うゝ あああいがんばりますう……」

地獄？ 天国？ いやいや地獄ですよこれはいやでもアディラさんんにやってもらえてるっていう点は天国なのでしょうかわかりませ

んもつ駄目です。

簡単な護身術を教えてもらうっていう名目で、アディラさんから習っているんですけど、なんか、護身用ではなくて本格的な剣術を教わってるような……。

護身で良かったんじゃないんですか？ あれ？ 私が間違ってるんですしたっけ？ 私がおかしいのかしらー。あはは。筋肉が痛いです。筋肉痛が響く響く。

「何考えてるんだい！？ 意識を逸らすようじゃ、あんたは死んでるよっ！」

「はいごめんなさいいいいいいい！！！」

眼の前に剣の一振りがくる。教わったように持っている短剣で對抗し、左側に受け流す。力のない私じゃ長い剣なんて持てないから短剣にしてとにかく受け流す方向でいつているのだ。

これだけでも精一杯なのに、攻撃を短剣で受けて反撃！ うりゃあ！ なんてできないですからね！ 非力な私にできるわけじゃないですよ！

召喚されて特別な力がついちゃった！ って展開はないんですから！ ……現実は厳しい。くうくうくう、つくづく必要なんですね、特典ってやつは。

私には、特に秀でた才があるってわけじゃないんですし。……今からでもいいのでくれませんか神様仏様ハルトムート様！

「よそ見するなって言っただろう！？」

「うぎゃー！」

鞭……じゃなかった、剣が私に向かって素早く振り下ろされる。

反射神経フル稼働で何とか後ろへと避けましたよ！ しかも今ビュオンって音鳴ってましたからね！

でもその前に私自身に突っ込みたい。うぎゃ、ってなんなんですか美夜さんよ……。女の子がそんなはしたない声だしちゃ駄目ですよーに！

「へえ、それでも考え事とは見上げたもんだね。……だったら考えなくさせるまでだー！」

「いいいいいいいやあああああああああああ！……ちょ、ま、ま、ままままままー！」

それから、アディラさんの猛攻撃が雨のように降ってくるのでした……。

攻撃してくる様はとても美しいのですがもう本当に無理です、無理です。勘弁して下さい……。

*

アディラさんとの戦闘訓練が終わって、軽く汗を流す。広いお風呂場があるんですよ。極楽極楽！

と言いたいんですけど、私が風呂にはいつている時、メイドさんも入ってくるので中々くつろげないんです。

貴族の豪華接待みたいな感じで、私の体を洗おうとしたり……！
！　そ、それはくすぐったいので遠慮しました。

他人に体を触られるのはどうもむず痒いんですよ。

着替え終わった後は、多少勉強をしてからの夕飯。その時、必ずハルトムートさんと一緒にとることになってるんです。

ハルトムートさんは忙しい中どうにか時間を作って、絶対一日に一回はいらっしゃるんですよ。

本当はわざわざ私のところに来る必要はないんだそうです。
ハルトムートさんも疲れているでしょうに。本当にマメな人ですよねえ……。そういうマメなところがいいんでしょうけど。

大体部屋には誰かメイドさんが待機してるんですけど、ハルトムートさんが「ただでさえ会える時間が少ないのだ、二人つきりにさせてくれないか」という小っ恥ずかしいお願いをしていたので、私とハルトムートさん以外部屋には誰もいない。

いても本当に空気の如く静かにしているから、そんなに変わらな
い気も……。いやいや、人目があるってことがあれですよ。はい。
でもいてほしいような、そうでないような……。ふ、複雑。だっ
て、年頃の男女が部屋で二人きりって、あのそのえーっとうんぬん
かんぬん。

一応婚約？ しているとはいえ、ここでのマナーとしてはあまり
いけないことであって、あーあああああううう。言わせ
んな恥ずかしい！

……。いや、ハルトムートさんだからそんなことはないって信じて
ますけど！ 煩惱は振り払う！ 払う！

「えーっと、そういえば！ ハルトムートさんの『ハルト』って部
分、私の国の名前みたいです」

「ミヤの国ですか？」

「はい、春の人って意味？ でいいのかな……。？ まあその、『春
人』か、晴れる人って意味の『晴人』っていうのがあったりするん
ですよ。他にも色々あるんですけどね」

食べ終わった食器を適当にどかして、棚から紙とペンを取り出し
て実際に漢字で書く。ついでにルビふって文字練習！

ここって西洋っぽいくせに、文字はアラビアとかエジプトという
か、そんなイメージの文字なんですよねー。

んーっと、よし、書けた。……ちょっと歪な気がしないでもないけど、読めれば、読めればいいんですよ！ ええ！

「……硬い字ですね、美夜の国の文字は」

「あー、まあ漢字はそうですね。大体カクカクしてます。ひらがなだと柔らかいんですけど」

珍しそうに漢字を見つめるハルトムートさん。少し大きく開いた目がなんか可愛いです。ず、ずるい。

おまけにひらがなでカキカキ。……ひらがなで『はると』ってなんだか間抜けな感じがしますね。いやいやいや、けなしているとかそういう訳ではなく。

ひらがな全般にいえることですからね！ ご、誤解しないでよねっ！ ……って、私は何キャラなの。

「様々な文字がミヤの世界にはあるんですね」

「まあ、私の国が特殊というかなんといえますか……。私の国ぐらいいですよ、こんなに文字あるのは」

寧ろ世界共通なここの文字の方が恐ろしい。神様から教わった文字であるぞー！ ってことで、どこの国も使っているらしいそう。宗教戦争とかはなく、実際に存在するラムフォを唯一神としているからなんですよね。……勉強しました！

ドヤアってなっていると、ハルトムートさんが痛い所を突いてきた。

「ミヤの名前にも意味があるのですか？」

そ、そこを突っ込みますかハルトムート様。突っ込んだじゃいけませんよハルトムート様。

こんなに似合わない名前ですらに本当に申し訳が立たなくなっているん

ですから！

「えー……と。漢字ではこう書きます」

美夜つと。流石書き慣れてる文字だけなあって、まあまあ綺麗に書けているように思える。何気にバランスが難しいんですね、この字。

うつうつうつ、あんまり説明したくないんですけど、うーん……。さ、サラッと終わらせればいいですよ……ね！

「こっちの字が、美しいとかそういったことを表す字で、こっちは夜を意味する字です」

指さしながら説明をさつさと終わらせる。夜は別にいいんですけど、『美』っていう漢字がどうも……。

よく名前に使われる字なのは分かってはいます。でも、自分にその字があるのがどうもしっくりこなくて。

こんな私が『美』なんて文字を使っていいのかと。

あ、トラウマとかあるわけじゃないです。私の顔は上でも下でもない普通の顔ですから！！

「なれば私は……こちらの文字がいいですね。晴れる人、という意味が含まれているのでしょうか？」

「意識ですけど。大体の人はそういうイメージを持つと思いますよ」

すつ、つと綺麗な指が『晴人』を指す。くつ。男の人なのにこんな綺麗な指をしているだなんて……！

がっしりとしているのに、無骨なカンジがしない美しい手つてどういうことですか。矛盾じゃないですか、矛盾！ くつ、勇者恐るべし。

「ミヤ」

「はいなんでございましょうか」

嫉妬でどつかいってた思考が呼びかけで戻される。だ、だって美しいんですもの……！ キー！！

「私のことを、この字の『ハルト』で呼んで頂けないでしょうか」「ハルト……、晴人ですか？」

「ええ、こちらの晴れるという意味合いの持つ名前で呼ばれたいのです。……あなたと対になれるのですから」

な、な、な、ま、ま、なん、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ちよ、な、なんていう、爽やかな笑顔でなんてことをおっしゃるんですか……！！
くくくくくくくくくくくさいことを！ でもイケメンだからありだ
と思えてしまつとかなんなんですか……！

ず、ずるい！ イケメンってずるいです！ うわー、わわわわわ、
顔が熱い。

……う、ハルトムートさん、そんな期待した眼で私を見ないで下さいお願いします。ほんと、私のような凡人にはきついんですよ。
きついんですってばー！

「わっ、分かりました、よ、呼びます呼びます！ ……は、晴人、
さん」

いいいいいいいいいやあああああああ恥ずかしい恥
ずかしい……！！

ハルトムートさんは一瞬目を見開いてから、輝かしい笑みを浮かべて私を見てくるし……！！

……今なら私、羞恥心で死ねます。

こんな感じで、てんやわんやな私の一日は過ぎてゆくのでした…。

「そついえばマビア」

豪華な椅子に座り、豪華なテーブルの上に乗ったお菓子をポリポリしながら呷く。今現在、お城のお庭でクッキー食べながらくつき中です。私の反対側には、同じくマビアが座っている。

いやー、すごい贅沢している気分です。実際そうなんですけど。貴婦人たちが優雅なお茶会！ みたいな感じでパラソル？ の下でポリポリしています。

あ、お勉強とか訓練とかサボっているわけじゃないですよ！ ちよっと休憩を頂いただけなんですからね！ 多分三時じゃないけど三時のおやつタイム！

ここって時計が作られてないので、正確な時間を測ることができていないんですね。だから大体としか言いようがないんです。太陽が一番上にある辺り、とか。

それにしても、しょっぱいお菓子とか和菓子が欲しくなる今日この頃でございます。お菓子といたら甘いものしかないですからね、ここ！

「マビアには家族はいないんですか？ こんな、私についてもらってちゃ、中々帰れないでしょうし……」

「心配など無用ですああでもミヤが私なんその心配をしてくださるだなんてなんて光栄なことなんでしょうこれは大切な思い出として二番目にしまっておきましょう勿論一番はミヤが私のことを見てくれた時ですよちなみにミヤ私には俗に言う血の繋がっている者はい

ますがミヤの仰るような家族はいないのですあれらは家族などとはいえないやつらなのですから気にしなくていいのです寧ろミヤにこのような心配をさせるようなヤツらなど滅ぼしてしまつたほうがいいでしょうねそうと決まれば早速滅ぼしにいきましょういい加減目障りですし工作もしてくる煩わしい蠅などこれを期に消滅してしまえばよいのですミヤの道を邪魔するというのがならば容赦など不要ミヤを殺させは私がいけませんという訳で行つて参りますミヤ」

「だ、ただただだめですマビアさんんんんんんん！」

そのまま魔法を使って消えようとするマビアさんの手を慌てて掴む。こつ、殺しとかは駄目なんですつてば！

……というか、さり気なく重要発言してませんでしたか！？ マビアさんの家族が私を殺そうとしているとかなんとか……。

しかもマビアさんの眼、ギラツギラしててちよつと、いや、かなり怖いです……。

「マ、マビアさん、あああああのですね、殺しは駄目です、殺しは！ ちゃんとそういうのは法で裁かれたほうがいいんですからね！ ？ 後、一応といいますか、家族ですし……」

「ミヤが殺されそうになつていてというのにそれは出来ません以前ミヤが仰つていた『目には目を齒には齒を』です殺そうとしてくるならなら殺してしまえですああこれもありましたね『殺られる前に殺れ』なんて素敵な言葉なのでしょうか言葉の通りだと思つのです第一私の血縁は私のことを家族だなんて思つていませんしそれは私も同様家族だなんて思つたことなどありません本当にただ血がつながつているだけなのですそんなミヤを殺そうとする下賤な奴ら等に家族の情など不要即刻消え去るべきなのです止められていましたがやはり待つことはできませんいくらミヤの為と言われてもミヤに害為す者を一瞬でもこの世に存在させるのはミヤによくないだから私はいくのですとめないで下さいミヤそれと私のことは呼び捨てでお

願いたはずです戻っていますよミヤでもそんな動揺して戻ってしまふミヤが好きです愛しています」

愛の告白をされてしまった、どうしよう。……じゃなくて!!
馬鹿、昔の私の馬鹿……! あんな言葉教えるもんじゃないでしょうに……!!

ってまたそこじゃなくて!! ええっと、つまりマビアとマビアの家族は仲が悪いってことなんでしょうか……? そして、私のことを殺そうとしている。

マビアは即刻家族のことを消したかったらしいんですけど、誰かに待ったをかけられている……んでしょうか。

ハルトムートさんなんですかね? そもそもマビアと接触しようとする人は、私とハルトムートさんくらいですし……。

理由は知らないんですけど、マビアはいろんな人から避けられている。最初は性格ゆえなのかな……. と思っていたけれど、どうも違うみたいなんですよ。

それにしても殺そうだなんてどうして……. って分かっていますとも邪魔なんですよね、私が。ひよつと出の意味不明な女ですからね! 分かっているも辛いものがあるってもんですよ……. はあ。

「マビア、もう一度言いますけど殺しは駄目です。私のせいで人が死んでしまふだなんて嫌ですし、なによりマビアに殺しをして欲しくないんですよ、わかります?」

「あああああああああああ私のことなど道具だと思って下さい私はミヤに仕える運命道具はなんでもします道具には道具の役割があるのですから私は殺しの道具ミヤの邪魔をするものを排除する道具なのです。私に対して情はいりません私はミヤから頂いた言葉や思い出だけでも十分幸せなのです。今私はミヤの為に生きることこそが至高生きがいであるのです。それにいずれはあいつらは始末しなければならぬのです。ミヤは何も気にしなく

ていいのですよ」

何も見ないふりなんてできるかー!! 流石にですね、死とかけ離れていた日本で育ちました私としては、死んだりとかさういった痛ましいことはできるだけ避けたいんですよ! できるだけ考えたくないことですし、ねえ。

あああ、でも、このままじゃあマビア行っちゃいますよね!?! 確実に抹殺しに行きますよね!?! ど、どうすれば止められるんでしょうか? ……!?!

えーつとあーつとうーつとええええええ……。ど、どどどどどうにでもなれー!!

「マママママママビア! 私と家族になりましたよ!?!」

……。マビアの手を両手で掴み言ってしまった。うん、何を言っているんでしょうか私は。頭おかしいんじゃないでしょうか。ほら、あのマビアでさえ固まってるじゃないですか……。

言い訳しますと、家族といい思い出がないならこれから作ればいいじゃない! という意味不明な思考回路に陥りまして……。自分としてもどうしてそこに至ったのか分かってないです。

……。マビアから返事が来ない。ずっと、不気味な笑顔を浮かべたままの状態だ。いつもなら私が喋り終えた後、間髪入れずに喋ってくるのに……。

不安です。流石に不安ですよ、こうもいつもと違うんですから! あ、あのー、マビアさんー? お、お返事は頂けないのでしょうかー?

目の前で手をぶんぶん振っても反応なし。う、やっぱりまずいことを言ってしまったんでしょうか……。

私がウジウジ悩んでいると、よづやくママが動き出した。ただしゆらりと。私の手を逆に優しく掴んで。普段ではありえないことを言った。

何を言われても、感じなかった。どうでもよかった。

世間では家族という奴らから食べ物を与えられなくなった。力があればなんとかなったので、別に気にならなかった。

私を殺そうとしてきた人がいた。思い通りに力が使えるようになったから殺した。私には死ななきゃいけない理由が見当たらなかったから。

死ねと言ってくるけれど、何故死ななくてはいけないのだろうか。自分の思い通りに私が動かないから？

なら私が死ぬ理由にならない。私の意志とは何ら関係もないのだ。

かといって何故生きているのかと言われると答えられなかった。生まれたから、生きている。それだけだ。

それ以外に何もなかった。何かを感じることもなく、淡々と過ごすことばかりだった。

気がついたら、理由を探していた。私が生きている理由。何の為に、私は生きるのか。

色んな所を回った。そこでも私は死ねと言われた。どうやら、私のことは広く知れ渡っているらしい。どうでもいい。生きる理由に関係があるわけではないのだし。

魔王の活動が目に見えて頻繁になった。魔物に襲われる回数が増えた。塩焼きにすると意外とおいしいことを知った。

おいしいから狩っていただけなのに、国から評価された。血縁がよろこんだ。意味不明。

アナタモヨウヤクヨキミチヲススモウトシテイルノネ。

なんの呪文だ。意味不明。

ついでに私より先に生まれたヤツがなにか言ってきたが、これまでの意味不明な呪文だったので覚えていない。

突然国から呼び出しをされた。別にいかなくても良かったけど、何となく行ってみた。なにかあるかもしれないから。

……そこで、私は出会った。出会ったのです。

私の生きる意味をくれる人を。

まっすぐに私自身だけを見つめ私に願い事してきた。あの、気持悪い笑顔はない。私に対していわゆる暴言を吐いてくることもない。

……私を、私だけを見ている。

他の奴らに気を取られることもなくただ私だけを。

私だけを！！

彼と出会ってから私の世界は一変したのです。全てが彼を彩っている。彼のために存在してる。何も感じる事が出来なかった日々が、どれもこれも素晴らしく見えたのです。私も、彼を彩るために存在している。

だから伝えたかった。私の深き想いを心を全部余すことなく伝えたかった。私がどれだけ貴方のことを想っているのか分からせたくって、口から出た言葉は全てを伝えるまで止まることなど出来なかった。

愛している、愛しているのです。今にも私は愛で死ねます。死ぬことが出来ます。貴方の為ならなんだってやれます。命も捧げます。人も殺します。貴方の道具になります。盾になります。貴方の為ならどこまでもいつまでもなんだってやりましょう貴方の為ならば！！

けれども。

彼は決して私を一番にすることはなかった。

彼は彼の一番を見つげるために、召喚魔法を開発していたのです。

憎かった。憎い。私を一番にしない彼が、彼が。どうして、どうして私を一番にしないのか分からなかった。貴方は私の人生を変えた人なのに。運命の人だというのに！！ どうして。どうして私が一番じゃないのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！ こんなにも！！

こんなにも私は貴方に貴方だけに全てを全てを捧げているのに貴方の為に生きているのに一番をどうしてくれないの私に私に下さい貴方のおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！私が悪いですか？私があまりにも汚いから。美しくないから。力がないから。つまらないから。駄目だから。だからのですか？どうして。どうして！！！！

だから。だから一緒に死のうとした。一番になれないのなら、もうそれしか方法は考えつかなかったのだ。

そう、思っていたのに。

ミヤは。

私に、触れた。

彼は確かに私を見ていた。でも見ていなかった。私を、私の本質を避けようとした。それでも良かったのに、ミヤは私を見て、私を拒絶した。触れた。私の本当を見た。

今まで誰も触れようとしなかった私に、触れた。

ミヤが触れた部分が熱い。熱い。じわりと私の全てを侵食していく。全身が火で焼かれているような感覚に陥る。私を焼き殺していく。同時に、歓喜が心を埋め尽くす。心臓が踊り狂って止まらない。

ミヤ。ミヤ。私の全て。

ミヤと出会うまでは確かに、彼は私の生きる一番の意味でした。今は共にミヤを守る者同士としての関係になっています。

優先順位は二番目になりましたが、彼がいなければミヤとは出会えなかったのですから。

ミヤ、ミヤ、好きです。貴方の願い事ならなんでもやります。貴方の願い事なら、なんでも。空にある星を取って来いと言われたら行きましょう。王を殺して来いと命じたならばやりましょう。貴方の為なら、貴方の為なら！！

なのに、あなたは。

どっしり。

「MMMMMMMMMMビア！ 私と家族になりましょう！？」

どっしりしてそんなことをおっしゃるのですか……？

三話

「それだけは絶対にできません」

信じられないほど穏やかな声だった。え、今の幻聴でしょ？ っ
て思うほどの。しかも長い喋りではなく単発！ 地獄の底から響い
てるような声でもない！

いつの間にかマビアの表情も優しい感じになっていてなんだか怖
いです。怖いです。こっ、こんなマビア見たことないんですけど…
…！…！

「あ、その、ごめん変なことを言ってしまったって！ やっぱりいきな
りそんなこと言っちゃ駄目ですよね！！ あ、あははははははは…
…」

でも、……ちょっとショックでした。今までマビアは、こつもき
つぱりと完全否定することってなかったんですよ。それがいいって
いう訳ではないんですけど、びっくりしたといえますか……。

うっん、複雑。いい傾向？ だとは思うんですけども。

「ミヤを傷つけてしまったようですな、すみません。しかしながら
これだけは譲れないのです。ミヤは汚れてしまっただけではないので
すから」

……このマビアは魔女から聖女にチェンジしたんでしょうか。怖
いんですけど、怖いんですけどば！！ 変わりすぎて怖い！ この
マビアは誰！？

いつも怖いとか思っていてごめんなさい、でもこっちの方が怖いです！

「ミヤ、私にとって家族とは嫌悪する対象です。排除すべき輩です。殺すべきものです。そんな括りにミヤを入れるわけにはいかないのです。絶対に。そう、絶対に絶対的に許されない」

聖女の笑みに影がさす。あ、禍々しさが戻ってきたような……。これでほっとするとか、私だいが毒されてますね。こっちの方が怖くないです。ではなく！

マビアにとって家族が安らげる存在じゃないってことは分かりました。でもでも、マビア的に考えるとそれって……。

「マビア、マビアにとって家族は家族じゃないのですよね？ なのにマビアは家族というそのものが嫌いになってる。血のつながっている人が家族じゃないと思ってるんなら、今のマビアに家族はいませんか？」

家族じゃないって言うているのに、結局マビアにとっては家族のまま、『家族』そのものを嫌がってるんですよね。今までの発言を省みると。すごくちぐはぐだったんでおかしいなーと思っていたんですよ。

私が言い終わった途端、またマビアが固まってしまいました。……困るんですってば。出方が分からなくなるじゃないですか！ マビアとにらめっこしていると、マビアは。

突然、一筋の涙を流した。

……あああああやっちゃったああああああああ……！
こ、このパターンはあれですね！ 私が見ついいこと言っちゃったパ

ターン！！

友達曰く、「美夜って無害そうな顔して棘持っているよね。素知らぬ顔してさっくりいくし」らしいそうです。後、暗殺得意そうだねとも言われました。何故。

とりあえずなんとかしないと……！！

「マツ、マビア！？ え、わ、あ、言い方きつかったですよね！？
ごめんなさい、気づかない内によくやっちゃうことがありますて
……！？」

「あ、あああ、あああああ、あああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ、
あ、あああ、あ、あああ、あ、あ、あ、み、ミヤ、ミヤ、ミ、
ヤ、ミヤミヤミヤ、ミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミ
ヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤ
あああああああ！！！！ あああああミヤ、ミヤ！！ 私のミヤ
！！ やはりミヤは私の神様なのです！！ 神よ、神よ！！ ミヤ
が私なんぞを家族としたいのならばそうしましょう！ 一般的に言
われる家族のようになりましょう！！ やはりあいつらは家族など
ではなかった、私に家族はいなかった！！ やつらとの繋がりはお
りませんが関係ない、家族ではないのだから！！ こんなにも心が晴
れることなど今までにはありませんでした！ ああ、ミヤ！ 私の
救い、私の神！ 私の……家族。うふっ、うふふふふふ、
ふふ、家族、家族、か・ぞ・く。家族ううううううううううう
ううううううううううううううううううううううううううう
！！！！」

狂喜乱舞。文字通りの様子になっているマビア。私の手をブンブ
ン振って、狂気なんだか喜びなんだかどちらともつかない笑みで……。

……ごめんなさい、前言撤回します。元に戻っても怖いものは怖

かったです……！！

「うふ、うふふふふ、家族家族、うふふふふふふ、ミヤ、ミヤ、ミヤにとつて、私は家族ならば誰なのでしょう？ 姉ですか妹ですか？ そのとも娘？ うふふふふふふ、母でもいいですよ、父でもいいですよ！！ 祖父や祖母だつてなんだつて！！ 私はミヤの希望に沿います！！ ミヤの家族になれるのならばなんだつて！！ ミヤ、愛してます愛してます愛してます！！ 溢れる想いは家族愛……！！ 愛……！！」

「おじいちゃんになれとかそんな無茶振りはしませんからね！？ えー、ええつと、マビアは何歳なんですか？ 私は16なんですけど……」

うつつ、私ちよつと早まったかもしれないです……。こ、怖い、怖いよー。

分かつてはいたんですけどね！！ もう腹をくくるしかありません……！！

「私ですか私は生まれてから15年程経ちましたミヤの一つ下ということになりますねああできればもう一年早く生まれたかったものですそうすればミヤと同じ年同じになれたのですからああああ今からやり直しできないものでしょうかそうすればあの忌々しい奴ではなくミヤと双子になれたというのに一緒に一緒うふふふふふ一緒になんて素敵なのでしょううふふふふふミヤと家族家族家族！！」

「え！？ 一つ下だったんですか！？ てっきり年上なのかと……。あ、じゃ、じゃあマビアは私の妹ですね！」

18くらいだと思っていました。流石外国顔……！ 童顔が標準装備らしい日本人の尺度では分からないものですね。今度周りの人にも年齢聞いてみよう。

……ん？ あれ、さつきなんかまた、マビア重要発言をしていたようなきがするんですが……。

「……マビア、貴方もしかして、双子……なんですか？」

「いいえもう双子ではありません家族ではないのですからしかし肉親的概念からいいますと存在します私より先に生まれたヤツなので俗にいう双子の姉になります確かミヤもご存知のはずです名前はずっかり失念しましたが私よりも髪の色が薄いヤツです眼の色は似ているかもしれませんがまったく汚らわしいミヤを殺そうするなどはり早々に抹殺しに行くべきですミヤと家族になれた記念に行くべきなのです」

「いやいや、記念日ならそんな犯罪を犯さないで下さい！！……私の知っている人がマビアの双子のお姉さん？」

「そもそもここでの知り合いは少ないほうですし、会ったとしたら絶対覚えてはいるはず。マビアの髪色より薄くて眼の色が同じっぽい人……？」

「マビアの髪の毛と眼は紅紫色。それを薄くするとしたら、赤系統の人ってことになる。アディラさん……はないですね。」

「いくら外人顔だからといって、年齢的にも身長的にもマビアと双子はありえませんし。となると……？」

「……も、もしかして、リーリナさんですか？」

「リーリナさんの髪の毛は桃色、眼は若干暗めのルビーみたいな色。それ以外に思いつく人なんていないんですけれども……！」

「そういった名前でしたでしょうかすみません覚えていないので分からないのですが多分ミヤの思い浮かべる人物で合っていると思います憎らしいミヤの脳内に存在させるだけでも嫌だというのに

やはりここは世界中から跡形もなくするべきなのでしょうねとなる
と段取りをしなくてはミヤを思えば屁でもないのですがミヤの不利
にならないようにするには色々としなくてはなりませんからうつふ
ふふ楽しみです」

不気味がデフォルトのマビマ。可愛らしいという言葉が当てはま
るリーリナさん。

双子にしては……に、似ていなさすぎやしませんか……。

四話

「家族、かあ……」

夕飯を食べながら考える。ハルトムートさんは多忙らしく、今日は一緒に食事はとっていない。……意外と一人での食事って寂しいんですね！ なんとなく味気ないです。

メイドさんにはいるんですけど、同じ食卓につく訳にはいかないらしく、ただいるだけなんですよ……。き、気まずい。

本当にお仕事としているだけなんですよね。当然には当然なんですけど、私としては仲良くなりたいたいと思いますか。同じ場所にいるんですから気まずい雰囲気のままっていうのも……。しかし、メイドさんに取り付く島もなし、といった感じで。

それに、メイドさんは入れ替わり立ち変わりするので名前も覚えられない。あとごめんなさい、外人さんの顔って似たような顔ばかりで中々覚えられないんです……！

メルフィナさんとかアディラさんとかは、特徴ありまくりで覚えやすかったんですよ。メイドさんは特徴あるようなことをしないで覚えづらいんです、と言いつつ……

……はあ。なんだか悩んでばかりです。

家族。そう家族です。家族……。

マビアに関しては、元々一人っ子だったので妹欲しいなー、と思っていたので問題ないです。ええ、問題なんてないです……多分。

これから妹ができたことよって、どうなっていくのか不安なんか抱いてないですよ！！ ええ！

今悩んでいるのは……元の世界の家族のこと。正直に言いますと、ほっとしている部分があるんです。

両親のことは好きですよ。お父さんもお母さんも、大変だろうに働きながら私のことを育ててくれて。家族で過ごしていても、電話が急にかかってきて仕事に行っちゃうなんてしょちゆうでしたし。

寂しいとは常日頃思っていましたけど、私の為にやっていることなんだって分かってからは、一人で自分のことくらいできるようにしたり、わがママを言わないように頑張ったり……。

なんてったって、私の為に両親は頑張っているんですからね！と、自惚れてみます。

……でも逆に考えると、私は両親の負担になっているってことじゃないですか。私がいなかったら両親は今よりも楽に暮らせて、のびのびとできていたかもしれない。

私は、いなかったほうが良かったのかも、って思ったりして。

だから、ある意味、この世界に来たのは良かったのかなって思っているんです。これで両親の負担になることはない。

良い事とは、分かってはいるんですけど、けれども……。

でも、寂しいんです。普段から会える時間は少なくとも、会えることには会えた。今は会うことはできません。

負担になるのは嫌でしたけど、会えなくなるのは……辛いです。

うー、あれですね。当初のようなドタバタしているのがいいです。寂しさなんて感じるような暇ないですからね！

困ったりはしますけど、マビアにはそういう意味で助かっています。

はあ、早くマビア帰ってきませんか……。今は見回りに行ってるんでしたっけ。

食事を終えて、ソファでだらーっとする。ああ、太りそう……。そしてメルフィナさんに怒られるんでしょうね、この格好。

「淑女がそのような格好をして良いと思っておりますの!?!?!」
「…そうでしたわね、貴方は淑女という柄ではありませんでしたものね」とでも言われそうです。

あ、腹がたつてきました、私の妄想だというのに。もうちょっと優しくしてくれた方がいいと思うんですよ!

「ミヤ様、少々よろしいでしょうか」

「はっ、はい!?!? なんてでしょう!?!?」

メイドさんに呼ばれて飛び起きる。び、びっくりしました。メイドさんって基本的に、決められた予定以外のことは話しかけてこないんです。だから何かあったのかなー、と。

「来て頂きたいところがあるのですが、」

「え!?!? い、いいですよ! よこんで!」

あ、思わずメイドさんの言葉を遮って言ってしまった! いえ、その、まさかのメイドさんからのアクションだったので嬉しいんですよ!

これを期に仲良くなれないかなーと思ひまして。思ってもみないチャンスです!

茶髪の髪の毛をまとめてアップにしたメイドさんは、私の即答にちよつとびっくりしてから、綺麗に微笑んで私を部屋の外へ促した。笑顔が艶やかでドキドキしてしまったのは秘密です。

なにがあるのかは分かりませんが、仲良くなってやります!

五話

常日頃から勇者で在り続けようとしていた。周りから勇者として期待され、その期待に答えようと勇者といえるような人間であろうと心がけた。

皆の幸せを願い、悪を討つ。常に公正であり、正義の体現者であらなければならない。

そんな、物語の人間に私はならなくてはならなかった。

物語は物語だ。私は所詮虚構の勇者である。どんなに創り上げても、本物の勇者に私はなれない。

なれないというのに、皆は私を勇者として祀り上げる。本当の私は、そんな人物でありはしないというのに。

……本物の私は、どこへいくのだろうか。勇者ではない私は、どこにいるのだろうか。人間である私は、どこに。

勇者であるのならば、人間の私がどこかへと行ってしまおう方が良いのだろう。消えてしまえば、私は勇者になれる。それが最善であると分かっているのに、どうしても私は私を捨てきれなかった。

歴代の勇者は愛する者を見つけることなくこの世界から離れていかれた。周りは生涯の伴侶を見つけ、人生を終えるというのになだ。望まぬ好意を寄せられ続け、精神を蝕まれながら勇者として生きていく。

歴代の勇者は役割を果たしていったが、彼らが幸せであったとは言えないだろう。寄り添い分かち合える人は存在しないのだから。

勇者は、神から承った使命だ。こなすことは私の存在意義である。だから勇者であろうとした。

けれども私は。歴代の勇者が手に入れることのなかった幸せを、手に入れたと思ってしまった。

ハルトムートという、一人の人間でありたい。勇者でない自分をなくしたくない。そう思うのは、罪なのだろうか。

それから私は召喚魔法の開発を決意し、数々の研究を重ねてきた。手っ取り早く完成させるために一人では行わず、様々な人々から意見や考えを聞きながら地道に一步一步進めていく。

無駄だと、やらなくていいと何度も止められはしたが、私は止めるなどできなかった。

皆が手に入れられる幸せを私も手にしては駄目なのだろうか。そんなことはないはずだ。私は人間で、羨ましがったりもする。それが、分からないのだろうか。

だから私は止めずに走り続けた。羨ましい　嫉妬という感情を抱きながら。

そして。

私はとうとう愛しき人を手に入れることができた。

……これほど、心が揺さぶられたことがあっただろうか。

彼女を見た瞬間、私の心は全て彼女に奪われた。いえ、私が捧げてしまったようなものだ。

彼女の一挙一動に、動揺する自分がある。彼女の声に、心を響かされる自分がある。今まで一度も感じたことのない感動が、襲ってくる。

自分が創り上げた勇者というものを、壊していく。人間の私が浮き彫りになっていく。望みが、欲望が、溢れ出して止まらない。

彼女が、愛おしい。

しかし、同時に恐ろしくもあった。私が触れていい方なのか、と私が接触する事により、彼女に何らかの悪影響を及ぼしてしまうのではないのか。美しい彼女を、汚してしまうのでは？

そう思いつつも、私は自らの欲を優先させてしまう。止めようとしても、枷は必ず外れてしまうようになっていた。

召喚をした時点で、彼女の意志を無視したのだ。これ以上自身の願望の押し付けはしたくないと思っているのに。

……彼女が、幸せであればいい。それだけで私はいいのだ。彼女は私に愛する心を教えてくれた。それだけで、それだけで……。

それだけであればいいのに、私は。

「ミヤがいまぜんどういうことですかあなたがどこかにミヤを隠し

たとてもいづのですかまさかミヤを独り占めにしようという魂胆なのですか許しません許しませんそれだけは許しませんもうミヤは私の家族なのです家族である以上共に暮らすのは当然でしょう心配するのも当然でしょうさっさとミヤを出して下さい私はミヤの家族なのですからうふふ家族家族私はミヤの家族家族ミヤは私の家族うふふふふふミヤだけが私の家族ミヤああミヤあなたただけなのですああミヤをミヤをミヤを！！」

「……待って下さいマビア。ミヤがいらないとはどういうことですか」「そのままの意味ですが私はミヤの家族となりミヤは私の家族となつたのですミヤが私の姉となり私はミヤの妹となりました家族を持つことはこんなにも幸せなことだとは知りませんでしたああもしかこれはミヤが私に課した試練なのでしょうか家族という絆を確かめるためにミヤああミヤそのようなことをしなくても私の全てはミヤにあるというのにそれでも確かめずにいられないのですねうふふふふこうやって絆の確認をしようというのもまた家族というものなのですねえいいでしょうやりますよミヤあなたの為なら！」

執務室に突如として現れたマビアだが、相変わらず話を通じない話が段々と逸れていくのだ。聞きたい事があつても、聞き出せるのは極僅か。

普段であれば微量の情報から推測して物事を進めていくのだが、今回はミヤについて微量だけでは済まされない事態だ。なんとしてもミヤがいなくなつてしまつた事についての詳細を聞き出さなくてはならない。

ミヤの立場を安定させる為に作成している書類を、軽く纏めて鍵付きの机に付属している棚の中にしまふ。私以外の者には開けられぬよう、魔法もつける。様々な貴族の弱点や不正も乗っているの、見つけられてしまつては困るのだ。

後ろ盾のないミヤは、この世界で過ごす事は難しい。私やマビア、ロルシャーエ様がいるとはいっても、味方は圧倒的に少ない。

いくら私が魔王を倒した褒美として、己の望む者を妻にする権利を得たとしても、あわよくばと強大な権力を得ようとする者がいる。そのような者からミヤを守るのに、今の私は動いている。中々時間がとれず、ミヤに会えないのが難点ですが。

第一にミヤの為とやっていきますが、将来私が治める国となる。膿は炙り出し消去しておかなければ。

……それよりもミヤ、貴女はマビアを家族としてしまったのですね。できることならば私がこちらでの最初の家族となりたかったのですが。

「試練ではありません、マビア。そもそもミヤが何も言わずに何処かへいなくなることがあるのでしょうか。ミヤならば必ず伝言か書き置きを残すはずです。ミヤの部屋に、何かありませんでしたか？ミヤに伝言を頼まれた者、ミヤの部屋に待機している者はいませんでしたか？」

「私に話しかけようとする者などいません私に話しかけていいのはミヤと貴方だけですそれ以外はいらないのですミヤの部屋にいてもいいのはミヤだけ招からざる者はいませんミヤから私にあてた手紙があるとしたら永久保存ものですミヤが私に私にこの私にあてたのですからミヤ貴女の字はとても可愛らしいたどたくて微笑ましいという気持ちになれます私が教えてあげたい私にミヤへ字を教える役目を私に変更して下さいさあ今すぐ今すぐ！！」

部屋には誰もおらず、伝言を頼まれた者はいない。また、書き置きがあつたわけでもないという事は、何かミヤにあった。それしかないだろう。

そういえば最近、私に好意を持つ女性の動きが妙だったような気がする。なるだけミヤには既婚者の侍女をつけたのですが。

既婚者は私に対して恋愛の情を持つことはない。仕事にプライド

を持つてやる者を選び、安心してミヤを任せたのですがどういふことなのでしようか。

何はともあれ、早急に動かなければ。

「それよりもミヤを探すほうが先です。マビア、ミヤ付きの侍女を全員ここへ連れてきて下さい、今すぐに」

恋焦がれた大事な人。貴女を誰かが何処かへやったというのならば、私は決して容赦などしません。

私の愛する人に手を出したのですから。

六話

女三人寄れば姦^{かしま}しい。……三人以上集まった場合はなんとはいえいいんですかね。姦^{かしま}ましい？ 姦^{かしま}ましい？ 姦^{かしま}姦^{かしま}姦^{かしま}姦^{かしま}姦^{かしま}姦^{かしま}……って、一体なにをしているんでしょう私。

なんかちよつとヤラシイですよ私。あらあら現実逃避しているんですよ私よ。ああそうなんです私！ よく分かりました！……はあ。本当に何をしちゃってるんですか美夜さんよ……。

「聞いているんですかあ？ ちゃんと、リーリナの言うことは聞かなきゃ駄目ですよ？」

「羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹、羊が四匹、羊が五匹、羊が六匹、羊が七匹、羊が」

「……ここに羊はいませんよあ？ 幻覚でも見ちゃってるんですか？」

だってもうお休みの時間帯じゃないですか！！ 夜更かしになりますよ！？ お肌の健康を思うといけない時間帯ですよ分かってるんですか！？ 夜更かしは女の敵！

だからみなさんお家に帰って寝ませんか。おやすみぐーぐーを推奨します！ そして私をこの豪華絢爛なお屋敷から私の部屋に帰して下さい！

朗らかに笑っているリーリナさん、夜だというのに神々しい照明、少しでも煌びやかに見せようと努力しているのが分かる、様々な階級の大勢の女性、ひろーいダンスホール……。

目が痛い頭が痛い視線が痛い殺気が痛い痛いいたい。なーんてこんなことになっているんでしょうか。

メイドさんと仲良くなるう！ と思つてメイドさんについて行っ

たらこのザマですよ。いえ、ある意味分かってはいたんですよ分かっては。

ハルトムートさんが私を好きな以上、私は世界中の女性から目の敵にされる存在ですからね！ 憎いつたらありやしないヤツですし！
でもですね、やはり同性のお友達は欲しいんです。今の私、友達といたらロールシャーエくらいですから！

だからほいほいついていったんです！。伝言を他のメイドさんをお願いしたから大丈夫だろうとか、友達欲しさに憎まれているの忘れた私も悪いとは思いますが！

うつつ、同性だからこそ恐ろしさを知っている分、これからが怖くて怖くて……。

「こんなに人がいるんですし、私が代表して言っちゃいますけど、」

「あああはいはいはい分かっていきます分かっていきます！！
ハルトムートさんから離れるってことですよね！？」

それ以外で私に何の用があるってんですか……。はっ！！
もしかして美肌を保つ為の禁断とされている秘訣を……。なんて、嘘です。嘘。ちよつとテンション上げたただけですってば。

またの名を現実逃避！……。はい、自分でもおかしくなっているなあとは自覚しております。こうでもしないとやってらんない気がするんですよ。

「分かってるならいいんですけどあ。まあ、ハルトムートさまが魅力的で離れがたいというのは分かるんですけど、本気じゃないのにいられるのは、わたしたちに失礼っていいですかあ」

手をもじもじ体ゆらゆらさせながらリーリナさんが話す。リーリナさんだからできる動作ですね……。

確かに、リーリナさんが言っていることは最もです。

私はまあとりあえずなるようになるの思考ですし、ハルトムートさんを本気で好きな方々にとっては凄くふざけた奴なのは分かります。

でもハルトムートさんの気持ちを考えると、離れるのもどうなのかなー、と。

好きな人と離れてしまうのは辛いです。親と離れてしまった今だからこそ、よく分かると思いますか。

気恥ずかしいことですけど、ハルトムートさんは私のことを好きでいてくれています。それを分かっているのに離れるのは、ハルトムートさんに対して酷なんじゃないですかね？

と思うんですけど……、どう解決しろっていうんですか。本気ではない私がハルトムートさんの側にいるのは世の女性から反感を買っていますし、かといって離れるとハルトムートさんに悪いですし……。ちなみにハルトムートさんのことを好きかと言われたら、まあ、その、好きです。と言っても、恋とか愛とかの好きじゃなくて、友人的なものなんですよね……。

いえ、いい人だとは分かっているんです。分かっているんですけどなんかその、きっかけがない？ とでも言いましょうか……。ううううううその、ごによごによ。

あああああもう、私にどうしろってんですか。そんな今選択を迫られても優柔不断な私には決めがたいんですけれども。

「とにかくく、あなたから離れてくれないといけないんですよ。そうでないとして、ハルトムートさま納得してくださらないので。あれですう、やってくれないというのなら、うふふ、さようならってことですね。」

「……つ、つまり、殺しちゃうぞってこと……です、よね。ななな

「なななーんでマビアと同じく殺しに直結させるんですか双子だからなんです、か……」

マビアのことを言った瞬間周りの空気が凍り、リーリナさんの表情がなくなる。マビアについて触れちゃいけない雰囲気があったのは分かってたんですけど、こんなに禁忌なんですか……？

「わたしをあんな化け物と一緒にするのはやめてくれませんかあ。あんなやつ、マーシア家の恥なんですから」

「そうですね、あんな化け物とリーリナ様と一緒にしないでくれます？ あの化け物のせいでリーリナ様は……」

貴族であろう人が付け加えて話してくる。周りの人も、貴族の人に同調して頷いていた。

「マーシア家……、多分マビアとリーリナさんの苗字だ。今更知りました。」

それにしても、化け物って。ヤンデレがすぎているとは思いますが、悪い子では……悪い子ではないですよ。

「あの、家族なんですから化け物とか、そこまで言うのはどうかと思」

「わたしから全てを奪っていくあんなやつわたしの家族なんかじゃないっ……！」

言葉の雷が走った。え、り、リーリナさんですか……？ 化けの皮というか、温厚な感じでいっていたのが剥がれてびっくりなんですけれども……。いくらなんでもマビアのことが嫌いすぎじゃないんでしょうか。

「そりゃあ怖いところもありますけど、……ありますけど！ なにもそこまで邪険にしなくても……。」

「……なんだか分からないって感じですね。教えてあげますよお。
あいつがどんなやつか」

ゾツとする笑みを浮かべて、リーリナさんは語り始めた。

七話

こほん、と1つ咳払いをしてリーリナさんが話し始める。

「人は、必ず魔力を持っているって知っていますか？」

あ、はい勉強しました！ と、ひとつ頷いておく。

この世界で生まれ、命を持つ全てのモノは必ず魔力を持っている。なんで魔力があるかって言いますと、ラムフォラスでは体にある機能の一部なんだそうです。ある意味、体力がもう一個あるような感じだそうです。

因みに私に魔力はありません。ラムフォラス生まれじゃないですからね！ でも、魔法を使えないのは悲しい……。

魔力を持っているからといって絶対に魔法が使える訳じゃなくて、適性が必要で誰しも使える訳じゃないんです。

だから魔法が使えない人はごろごろいる。つまり私は仲間外れじゃないってことです！

呪文を唱えるのは、自分の中の魔力を外に引つ張り出す為。料理は様々な手間をかけて、できあがりますよね？ その手間の部分にあたるのが呪文なんです。

マビアは手間をふっ飛ばして料理を作っちゃうので、天才に分類される。うーん……、なんか違和感が。マビア、奇人変人ヤンデレですし。

「わたしは、その魔力が生まれ持つて少なすぎるんですよ。折角魔法の名門とされている家に生まれたのに。それもこれも、

あいつのせいなんですけどね。あいつがわたしから魔力を奪っていったんですから。」

く、黒い。その笑みは黒いです。腹黒とかそういう方面じゃない黒さで怖い……。

……でもなんでマビアのせいなんでしょうか。あれですか？ 兄弟間によくある、「頭の賢さは全部兄が取ってしまってしまったから、俺は頭が悪い」的な。

それだったら逆恨みにもほどがありますよ。マビア悪くない！ 逆恨みよくない！

「本当だったら、今のわたしは普通の子だったんですよ。それなりの幸せももらえて、それなりに悲しんだりして、そんな女の子になるはずだったんですよ。」

……そんな仮定の話をされましても。もしも、 だったら。そんなの今となってはありえない話なんですから、言ってもどうしようもないと思うんですよね。

『もしも』そうなったとして、『もしも』本当に言ったような事になっっているかなんて分かんないですし。

私自身も仮定の話をしたりはしますけど、それとこれとは違うといますか。根本的な仮定の話をされても困るっていうことです！

「なのに。あいつがいたからわたしはこんな風になっちゃったんですよ。こんな風に話すこともなかったと思うんです。だってえ、実際はわたし馬鹿じゃないんですよ。」

いえ、なんとなく分かっていました。計算高いといいますが、打算しているような所が垣間見えてましたから！ 只の天然ちゃんだとは思ってませんから！

でもそれを自分で言っちゃうのは駄目だと思います！

「みんなリーリナのこと、可愛がってくれましたあ。最初は嬉しかったんです。でも、段々イライラしてきたんですよ。みんなリーリナのこと、可哀想って言ってます。リーリナちゃんは可哀想。あんなやつと双子だなんて可哀想。トドメにですね、あんなやつと比べたらリーリナちゃんの方がよっぽどできた人間だ、って言ってくるんですよ」

にこやかに話しているのに、リーリナさんの瞳には涙が溜まってきている。

……周りの人達はなんだか気まずそうな雰囲気。リーリナさんが言っているようなこと、言った覚えでもあるんでしょうか。

「わたし、それが嫌だったんですよ。でも、わたしがこうやって可愛くて可哀想な馬鹿でないとか、みんなかまってくれないんですよ。もう疲れちゃったんでぶちまけますけど」

ささささ最後の台詞での温度差が激しすぎて背筋がヒヤツとしました。化けの皮どころか、中のえぐい肉まで見ちゃった気分です……。

溜まっていた涙が、一筋の跡を残しながら流れ落ちる。表情は氷のようなものになり、そのままの温度でリーリナさんは話を続けていく。

「結局わたしはあいつと比較されなくちゃいけないのかなと。比較されることでしかわたしの存在価値はないのかなと。あいつは他人で家族なんかじゃないのに。そう思っちゃったんです。……できた人間？ 何を言っているんですかねえ？ 魔法の名門に生まれたのに魔法の使えないわたしなんて、全然できた人間じゃなくて出来損

ないなんですから。そうだと思いますか？」

酷く冷めた声が、辛そうだった。

「わたしから色んなものを奪っていくあいつが憎かった。だから、わたしも奪ってやろうと思ったんです。あいつの好きな人、ハルトムートさまを。でも、ハルトムートさま、すごい素敵だったんです。本気になってしまったんです。ハルトムートさまはあいつとわたしを比べたりなんかしない。リーリナのことを見てくれる。リーリナを見てくれるんです。だから婚約者なんかいららないし、あなたなんかハルトムートさまは渡せないんですよ」

真髓な眼が、私を離さない。……本気で、ハルトムートさんのことが好きなのだと訴えてくる。

う、うわああああ……。重い、重すぎますよこれ。こんな思いを持っている人が何人いるんですか……。

そんな人達相手に私頑張ろうとしてるんですか！？ む、無茶じゃないですか……。

うつつ、先が思いやられる、というかもう既に手遅れですかそうですか勘弁して下さい。

……ん？ 結局リーリナさんは、マビアと比較されることなく、自分自身を見てもらいたって言っているんですよね？

まあその、なんと言いますか。

「やっぱり双子ですね。マビアとリーリナさん、似ています。二人とも自分のことを見て欲しくてたまらないんですから。やっぱり一番自分のことを分かってくれるのは、自分という存在に一番近い人なんじゃないですか？ 一度話し合ったらどうです……か……」

「誰が」

八話

私は建国に携わった者の子孫として知られる、リアーズ家の長女として生まれました。

名前の二番目には”ル”を賜り、歴史ある家の者として恥のないよう心がけ、常に誇りを持って日々を生きているのです。

シュレイヴァーン家と懇意にできたのも、私がリアーズ家の娘だったから。幼い頃から彼を知り、誰よりも彼を見つめてきました。彼が巫女様　　ロルシャー工様によるラムフォ神からの御言葉により、勇者であると定められる前から、ずっと。

勇者になった彼は、目覚ましい成長と活躍をあげていきました。元から素晴らしいお方になるだろうとは思っていたのです。

ですが勇者であると判明した途端、彼に注目が集まり沢山の光が当たるようになりました。彼の為に様々なものが与えられ、更に彼の能力を高めようと最高の教育や贈り物が彼に与えられたのです。

彼の両親も自身の息子が勇者であったことに大いに喜ばれ、惜しみなく彼を勇者として相応しい者に育て上げようとなさいました。

彼はそんな大勢の人々から寄せられる期待に答えようと、日夜勉強や鍛錬を励み努力していたのです。

何事も一発で覚えてしまい、上手くこなしてしまう彼だということに、努力を惜しまない素晴らしい人でした。

私は勇者として立派にあるとする彼を、支えていこうと思ったのです。

リアーズ家長女としても、彼の隣に立つに値する人としても、面

目の立つ女性としてあるうとしました。

彼の隣で、彼を支えていたい。……彼と、共にありたい。
ただその一心だけでした。

彼もまた、「共に国を良くしていきましょう」と言ってお下さって、
私は彼と共にいて良いのだと思ったのです。

けれども、彼は。彼はそんな私の思いを裏切ったのです。……いえ、裏切ったのは違うのでしょうか、彼にとつては。

彼は彼なりに思うことがあって、召喚だなんて事をなそうとしているのでしようから。裏切ったと思っているのは……、私の勝手なのです。

そう、私の勝手。こうして傷ついているのも、私が勝手にやっているだけ。勝手に傷ついているだけなのです……。

本当に、私は滑稽な女なのでしょう。報われることがないかもしれない。それでも思い続ける私は愚かなのでしょうか。

彼に好きな人が現れたのですから、諦めたほうが楽になれる。幸せになれる。

分かっているのです。分かっているのです。それでも諦めること
ができない私は、愚か者なのです……。

ある宵のこと。突然彼が、……いえ、突然とは言えませぬ。私は来るだろうと思っておりました。彼が、ハルトムートが共を連れて私の家に訪ねてきたのです。

両親が迎えようとしたが、私に用事があったいらしているのは明白。お願いして、私が迎えました。

「……ハルトムート。ようこそいらっしゃいました」

「突然の訪問申し訳ありません。緊急事態が起きました。貴女に協力して頂きたいのです」

どことなく焦燥とした表情をしながら、に私を見つめるハルトムート。

「……私が素直に協力するものだと思っているのですね、貴方は。」

私が今まで馬鹿みたいに貴方へ尽くしていたのは、全て貴方と共にいたいからだだったといいますのに。

それでも、私は……。

「あの娘のことなのでしょう、ハルトムート」

「ええ。ミヤがいなくなりました。どうやら大勢の女性が関わっているようなのですが、巧妙に隠されており、ミヤの居場所を早々に見つけることが叶いません。時間が惜しいのです。……貴女ならば、何か知っているのではないかと思ひまして」

「私が、やったとはお思いになりませんか？」

「……貴女が、ですか？」

「え、ええ。そうですわ」

普段からして、私がやっていると思っても悪くはないはずなのです。いつも私はあの娘に対して、ひどく八つ当たりをしているのですから。

ハルトムートの心を、持って行ってしまつて。その割には本人、その気がないというふざけた人なんですもの。

何年も思ってきた私より、たった一瞬でハルトムートの心を奪つていった娘が憎くなるのは当然だと思うのです。

ですから八つ当たりに関しては、私が悪いと思うことは少しもないと思いますの。

……けれど、今回は私が悪い部分もあります。あの娘の居場所を知っておきながら、ハルトムートに知らせようとしなかったのですから。

ハルトムートがいらっしやった少々前のことです。ある一人の女が、私を訪ねてきました。

マーシア家に生まれながらにして、双子の妹に魔力を奪われたとされる哀れな女、リーリナ。

彼女は私に、あの娘の誘拐を持ちかけてきました。

今夜ならば、ハルトムートは忙しくあの娘と一緒にいることもない。忌まわしき魔女も、定期的に見回りをする時がある。

その隙を突いてあの娘を誘拐して、脅すか殺してしまいたいでしょう、と。

……甘美なる悪魔の囁きでした。あの娘がいなくなれば、ハルトムートは私を見てくれるかもしれません。

私を、愛してくれる。ハルトムートと共に未来を築くことができ。本当にそうならたのならば、なんて幸せなのでしょう。幻想的な未来予想が、リーリナの手を取れと訴えてくる。

けれども、私は。

私は、誇り高きリアーズ家の娘。

そのような愚行は、できない。

結局私は、誘いに乗ることなく今に至るのです。

女としては馬鹿な意地を持ったものだと思います。

けれど、そんな意地よりも大切なものが私にはあった。

……それだけのことです。

だからといって、私が誘いを断ったことをハルトムートが知るはずありません。

疑われても当然のはずであるといえますのに。

「ありえません。貴女が誇り高き方だと、私は分かっています」

美しい蒼の瞳を輝かせながら、はっきりと貴方は言い切る。

……何故、貴方はこうも簡単に否定して下さるのでしょうか。何の疑いもなく、盲目ともいえる程に。

「……ですから、私は貴方の事が好きなのですわ」

私を分かってくださる、貴方が。

「……すみません。その貴女の想いに、私は答えることはできない」
「分かっておりますわ。……もう、十二分に」

眼がじんわりと熱くなり、水を流そうとするのをぐっと堪える。
涙は女の武器。意図しないところで使うべきものではない。
一度しっかりと眼を閉じて、出ていこうとするのを完全に抑える。

……もう、とどめは刺された。

ゆっくりと瞳を開け、口を開け。
恋した人に、お別れを告げた。

「説明申し上げます、ハルトムート様。ミヤ様の行方を」

私はリアーズ家の娘、メルフィナ。王を支え、国を支え、礎となる者。

王となる貴方の為ならば、協力は惜しみません。

九話

「殺す。殺す。殺します。あんなやつと似ているだなんて信じられない。耐えられない！」

頭を思いつき振って否定するリーリナさん。

いや、そりゃあ双子ですから似ているに決まっているでしょうに……。違う場合もありますけど、貴方達双子にそれは当てはまりませんよ。

「ふざけないで、ふざけるな、許せない、許せない！！……ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ、出番ですよー。わたしの可愛い兵士ちゃん」

リーリナさんの言葉を皮切りに、扉からいかにも魔術師的な格好をした女性の人が出てくる。いや、嘘ですすみません、実際に魔術師さんですね！

そして私に対しての敵意バンバンなのが凄くよく分かります。なんとという形相をしてるんですか。怖いんですけれども……！！

「炎で焼き切つてしまえばあ、行方不明扱いもできますよねえ？
だって遺体がないんですからあ。そしてハルトムート様にはこう言っておきますー。ミヤさんは他の男性と駆け落ちしましたあ、って」「え、焼いたとしても骨残りますよね？」

「……残っちゃうんですかあ？でも骨だけだったら、もう分かりませんよねえ」

あ、それは確かにそうですね。骨だけだと、ここじゃあ誰かなんて分かりませんし。ここにDNA鑑定とかあったらびっくりてすよ！ 土葬の文化らしいので、焼いた場合なんてそんな分かりませんよね。

それにハルトムートさんが駆け落ちしたとしても、「そうミヤが望んだのならば……」とかいつて納得しそう。うーん、それはそれで複雑ですなんか。

……つて、駄目じゃない美夜！！ 今、正に！ 物凄くピンチじゃない！！ なんとかしないと焼かれちゃう！ 焼かれながら死ぬとか何それ怖い！ 魔術師さん方は呪文を唱え始めてますしいい……！！

心なしか、周りの人達もリーリナさんがやろうとしていることに戦慄し始めた。まさか目の前で殺人が起こると思っていなかったよついで。

みなさん怖いですよね！？ ね！？ なら止めませんか！？

「あああああの人を焼くとですね、とてつもない臭いを発するそうなんですよ！！ だから止めませんか！？」

「臭いのは嫌ですけどー、それとこれとは別ですからあー」

唇を僅かに尖らせながら、髪の毛をくるくる弄りつつ言っている。な、なんか本当にどうでもいいって感じですね！ 余計に怖いんですけれども！

魔術師さん達の呪文も完成間近なのか、なんかエネルギー的な赤い光がうようよと漂っている。そして、言い切った瞬間。

魔術師さんの目の前に、大きな炎の塊が現れた。まあまあ距離が離れているというのに、熱気が！ 熱気が伝わってきます！

「ま、まさかそれをぶつけてくるとかそんなんじゃないです……よ

ね？」

「えー、もちろんそうじゃないですかー」

「いやいやいやいや、そんな炎だったら骨まで焼き切られる自信ありますから！ 骨さえ残らないとか悲しすぎます！」

「というわけでー、やっちゃって下さいなあ。私の兵士ちゃん」

とてつもなくいい笑顔をしながらリーリナさんが命令して、炎が私の方へと向かってくる。

「し、死ぬんですか。……死ぬのかあ。なんか、本当にあっけない人生でしたねえ……。でもまあめったにない経験もしましたし人生としては面白い方だったんじゃないんですかね？」

とか、そうやって私は遠い何処かに旅立っていたんですけれども、目下に迫っていた炎が突然青い炎に飲み込まれたかと思うと、魔術師の人達が強い衝撃を受けたのかのように一度体をビクリとさせて、そのまま床に倒れていきました。

……え、え、何事？

「ま、まさか、上位破棄!？」

「リーリナさんは青い顔をしながらそう叫んだ。じよ、上位破棄？ まだよく魔法のことは勉強してないのでよく分からないんですけども。」

「多分、今使っていた魔法より強い魔法で何かしらしたってことなんでしょうか。やっぱり分かりません！」

「使えませんが魔法の勉強もしくちやいけませんね、これは。」

「ちなみに青い炎は私を中心としてゆっくり旋回しています。この青い炎はなんなんでしょうか。さっきの事を考えると、私を守ってくれたんですかね？」

青いつていうことはすごく熱い炎のはずなんですけど……、何故か赤い炎とは違い熱気を感じません。

氷の炎とか……って、それはいくらここがファンタジー世界だとしてもないですよー。確かめてみたいですけど、どちらにしろ火傷確定なのでしませんよ！

じーっと青い炎を見ていると、後ろにある恐らく正面玄関に続いている扉の方から、木がバリバリとぶち壊れる音がした。

音につられて後ろへ向くと、巨大なハンマーでぶん殴られたかのように正面扉がぶち壊される。ちょ、木くずが飛び散って危なすぎますー！！

扉近くにいた人達が被害を被ってキヤーキヤー言ってますから！
！ それ以外の人も扉がぶち壊されたことにキヤーキヤー言ってますけど。

埃やら何やらが舞い上がってよく見えない中を裂くように、2つの人影が飛び出してくる。

前にいたのは相変わらずの凶悪な笑みを浮かべたマビア。文字通り飛んできたのか宙に浮いています。

後ろには、そのマビアの腕を握って一緒に飛んできたであろう、真剣な表情をしたハルトムートさんがいた。今はもう着地して、腕も握っていない。……風に煽られて乱れた髪が色気を醸しだしています。エロい！

でもなんで、いえ、なんでつてわけじゃないんですけど、うーん、どうしてマビアの腕握ってたんでしょうか。いや、多分突っ込んでいくマビアに便乗する為にやったんじゃないのかなーとは思ってますけれど。

なんでなんでしよう。ちょーっとジェラシー感じてしまうような？ 気がする、ような？ いや、いや、まさか、ねえ。ないない。ないですよ。

……ないですから！

十話

えっほんごっほんえっほん！！ まあまあそれはさておき。そーんなことよりも今の状況が大切ですからね！ ね！

と言つても今現在現実逃避がしたいです。させて下さい切実に。私がいよいよまっさかーとなつている内に、マビアとリーリナさんによるそれはもう盛大な姉妹喧嘩が始まつていたのです……。

「ミヤをあのような炎で焼こうとするなど頭が狂っているのですね私の『蒼の焰』で簡単に破棄出来るというのにはああ哀想に頭が悪いとミヤの魅力に気がつくことができないのですね哀れな奴そもそもあのような低俗な魔法を使う辺り高が知れているといえますか間違えました馬鹿です大馬鹿です大馬鹿者ですミヤこそこの世で一番価値のあるお方だというのにそしてミヤに相応しいのは彼だけいくらどうしようが全て無駄なのですミヤには彼が彼はミヤが唯一なのですから無駄に足掻いても無駄であることに変わりないのですよ馬鹿が」

「あなたなんかに言われたくないんですけど。わたしのモノを散々奪つておいてよくもそんなことが言えますよね。魔力は全部あなたが奪つていつて私の幸せを奪おうとするんですから。今だってそうです。折角私が幸せへ道を掴もうとしているのに邪魔をして。何がしたいんですか？ そんなにわたしの邪魔をしたいんですか？ だとしたらただでさえ駄目だというのに最低最悪な人ですね。あーあ、こんな人がわたしの双子の妹だなんて信じられません。本当にあなたなんか生まれなければよかったのに」

「あれ私の双子の姉だった人ではありませんかこれはどうもどうも

「ごきげんようふうふうふうふうもう大丈夫ですよ私はもうマビア・マシアではありませんから今の私はマビア・カシマなのです私はミヤの妹なのですミヤの妹ミヤの妹ミヤの妹うふうふうふう私はミヤの妹マビア・カシマ私にはミヤ以外の家族はいないのでああああなんて素晴らしいのでしようミヤの家族家族家族家族家族家族私がミヤの唯一の家族ううううううううううううああああああああははははははははははははミヤミヤ愛していますミヤミヤこそが唯一ミヤこそが一番ミヤこそこの世で一番素晴らしい人物ミヤミヤミヤミヤミヤ!!!」

二人とも黒い顔しながら向き合っでぐちぐちククク言い合っています。

……あ、あのマビア。本筋からずれていっていますからね？ 心なしかリーリナさんの顔が引きつっていますから！

とうかこんな大勢いる中でそんなこと叫ばないで下さいな……。は、恥ずかしい。あ、でも、未だにうようよししている青い炎で守ってくれたのマビアなんです！ 後でお礼を言わせて下さい。後で。

「あ、あなたなんか可愛されるだなんてよっぽどおかしい人なんでしょうね。そんな人、ハルトムートさまに相応しくないんですからいきなり出てきてハルトムートさまの愛を受け取るうとするだなんて、本当に信じられない。今までわたし達が頑張ってきたのはなんだったんですか。わたしたちの努力はどこに行くというんですか。わたしたちの愛の方がよっぽど大きいんですから。あの人以外だつたらまだ納得いきます。けれどあの人だけは許せない。事態に向き合おうとしない人なんて最低ですから！」

私を殺すような視線でリーリナさんが睨んでくる。う、心が痛い。いや、結構こちらに来てから1ヶ月くらいたってますけど、未だに夢見心地といえますか……。

が甲高く叫び始めた。

「なんなの、なんなのよ、そうやって勝手に、勝手に愛だとか何だとか言っつて、ふざけないでよっ！ わたしは？ わたしはどうなるの？ わたしは愛されないの？ ずっとずっと可哀想可哀想言われて、……それで終わり？ そんなの、そんなの嫌、絶対に嫌！！わたしも愛されたい、愛されたいっ！ それなのにどうしていきなり出てきたあなたが愛を奪い去っていくの！？ あなたなんか愛される資格なんてないのにつ！」

えーっと、資格云々はリーリナさんが決めることではないですよよよのよ。でもそこまで言われると流石に傷つくんですけど……。

「あなたなんか、あなたなんか来なければよかったのにつ！！」

う、うわ、どぎつい一言来ました。ついでにマビアの怒りが一気に最高潮になっちゃってますし。禍々しいオーラみたいなのがマビアの周りに漂っています。

来なければ良かった、ですか。八つ当たりなんでしょうけど、それなりに大変で色々あったけれども楽しくやっていた身としては、……ちょっときついです。

リーリナさんの口が開いて、また何かを言おうとしているのが見える。あーっと、もうこれ以上は勘弁して下さい……。

「 静粛に。これ以上の発言は許しません」

え？ ハルトムート、さん？

十一話

有無を言わせないよう命令した後、一歩一歩踏みしめるようにハルトムートさんはこつちに歩いてくる。リーリナさんも含めた女の人達は、ハルトムートさんの言葉が聞いたのか喋るところか一ミリも動かない。マビアはマビアで、ハルトムートさんの方を見たかと思つとひとつ頷いて、怒りを収めていた。

ま、まさか、あの温厚で優しいハルトムートさんがあんなことを言うだなんて……。というかこんな風に怒らない人だと思つていました。

でも、今のハルトムートさんは何もかも寄せ付けない雰囲気が出てます。優しい爽やか系イケメンから氷の独裁王子様へ変わってしまった。すごく意外です。こんな一面もあったんですね。勇者様をやっていたくらいですしハルトムートさんにそういったモノがあつても、よく考えたら当然といえばそうなんですけれども。そういうしている内に、ハルトムートさんが私の近くに辿りついてしまいました。冷やかな雰囲気なので、ちよつと、いえ、かなり怖いです。

「……ミヤ、お怪我はありませんか」

冷たい表情になっていたのが融けて笑顔になり、柔らかな声色で私に訪ねてくる。

あ、いつもの優しいハルトムートさんです！ ホツとしましたよー。冷たい態度のまま接されたら、ただでさえ落ちているのに更に落ち込んでいます。

すぐさま返事をしようとしたんですけど、そういえばさっき喋っ

ては駄目だつて言つてましたよね！？ お、お口チャーク！！
いつまでも話そうとしない私に、怪訝な表情をしたハルトムートさん。くっ、こういう顔も様になるんだから、これだから美形つてやつは……！ って、なに変な嫉妬しているんでしょうか。

「もしかして私の発言が原因ですか？ それならばいいのです。話しても大丈夫ですよ」

「あ、はい！ 大丈夫ですよ、ハルトムートさん。肉体的にも精神的にもピンピンしてます！」

さっきのリーリナさんから言葉はきつかったですけども、今はもう回復しました！

問題があるとすれば早い所寝ておかないといけない点ですかね。夜更かしはお肌の天敵ですから。

「そう、ですか。それならばよいのです」

何処か腑に落ちないような顔のまま、ハルトムートさんは私に向いていた体の向きをそらした。

ん？ 何か不味い発言でもしましたっけ？ 当たり障りのないものだったと思うんですけど……。引っかかったのは一体なんでしょうか。

「さて。貴女方は一体何をしようとしていたのですか」

再び氷の独裁王子様が降臨なさりました。美しく光る蒼の瞳が逆に恐ろしい。

滑るようにハルトムートさんは周りの人達を見ていく。見られた人は、恐ろしさに体を竦めていった。

好きな人が怒ったらそりゃ怖いですよー……。これは怖すぎま

すよ、トラウマものですよっ。

「ミヤは私の婚約者です。それを分かった上で貴女方はミヤを誘拐したのですよね」

「そっ、そんな誘拐だなんて！ 合意の上でそいつは来たんですよ！？」

とっさに町民らしき人が声をあげた。お、仰る通りでございます……。まぬけですねまぬけ！ 警戒心が足らなさ過ぎでしたよね！ 少しは疑えと。常に女性からは敵意を向かっていると面白いなさい、美夜！

「喋ることを許可した覚えはありません」

ハルトムートさんが喋った人を視線で射貫く。厳しい視線を送られた人はもう涙目になっていた。

こ、怖い、怖い。ハルトムートさん本当に怖い。別人かって疑ってしまっくらい怖いんですけれども……！

やっぱり普段怒らない人を怒らせると大変ということが証明されました、やったね！ とか言ってられないです。

「今のミヤは私の保護下にあるのです、私に許可をとらず無断で連れ去るのは立派な誘拐になります」

つまり私が伝言頼もつが、直接ハルトムートさんに許可をとらないと結局駄目だったってということですかね？ う、うわぁ、だったら私最悪な子じゃないですか！

伝言だけじゃ駄目なんですね。ほ、本当に私駄目な子だ。知らない内に何処かに行かれたら、そりゃ心配します。

今まで勉強詰めを外に出なかつたから分からなかつたのもありま

すけど、私はもう少し自分の置かれた状況を見直さないと駄目ですね……。

「今一度、己の罪を自覚しなさい。このようなことをして、私が貴女方に目を向けると思っているのですか」

それは、ないですよね。ハルトムートさん王子様ですし、勇者様でもあつたんですから。まあ、元々の性格からして許せる行為じゃないでしょうし。

あ、あー……。何人かの人が泣き出してしまいました。うーん、そうまでしてもハルトムートさんが欲しかったんですよ。

許せるかって言われたら、う、ごによごによですけど、気持ちは分からないでもないといえますか。

………どんなことをしてまでも手に入りたいものって、ありますから。

「それに、………例えミヤがいなくなったとしても、私が貴女方に振り向くことはありません」

僅かに眼を伏せながら、寂しそうにハルトムートさんが呟く。

『絶対ハーレム』の呪いがありますからね。呪いがあることを理解されないのは、こういうことに繋がってしまうものなんですか……。

なんだか、ますますハルトムートさんが不憫に思えてきました……。が、頑張つて下さいハルトムートさん、未来はありますから！わ、私も幸せになれるよう手伝いますよ！

「リーリナ・マーシア以外、この場から去るように。外に兵士が待機しているはずですよ。兵士の指示に従いなさい」

しばらくはみんな動かなかった。ハルトムートさんに言われた言葉がかなりショックだったのだろう。

いつまでもやって来ないのにしびれを切らしたのか、何人かの兵士がやってきてハルトムートさんとアイコンタクトをとってから、女の人達を外に出るよう促した。

泣き崩れてしまつて中々出れない人もいたけれども、皆さん兵士の指示に従つて出て行く。

こうして残つたのは私、ハルトムートさん、マビア。そして、俯いていて顔を上げようとしないリーリナさんだった。

十二話

「やっぱり」

肩を震わせて、ぼそりとリーリナさんが呟く。声は、掠れていた。

「ほら、こうやって何をしても成功しない。何をしたって幸せにならない。何をしたって愛されることなんかないっ」

「そうやって悲劇に酔って酔って酔いまくって楽しいのですか何もかも自分が不幸だと思って私としては面白いからいいですけれども結局幸せになるために真つ当な努力をしていたといえるのですか私はミヤの為に日々努力をしていますミヤに害為すものを駆逐に駆逐を重ね処分し痛めつけ悲鳴を上げさせ一生幸せに生きていけると思わせないほどにして逆らわないようにするのですああミヤミヤミヤミヤミヤを傷つけようとする者は全て滅しますそれが私の努力なげならば私はミヤがいてこそ存在するのですからミヤミヤミヤミヤああミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤあああああああああああ

そそそそという努力はいららないですから、いららないですからねマ
ピア！ 怖いことしないで下さい！

「あなたはそうやって自分一人で幸せに浸ってるだけでしょう！？
馬鹿みたい。私はそんな独りよがりな幸せはいららない。私が欲しいのはあたえられる幸せなの！」

リーリナさんは、ありつただけの憎しみが込められた顔でマビアを睨んでいる。マビア素知らぬ顔だ。

わ、我儂な人ですね。マビアの努力が足りないという言葉も、あながち間違いないですよ、これは。悲劇のヒロインぶっている、とてもいいですか。

自分から何かしようとしないと、事態がどうにかなるわけじゃないですじ。

じと目になっていると、ハルトムートさんがため息1つついてから話し始めました。

「貴女は忘れていようですね。貴女自身を愛している人がいるという事を」

「そんな人、いません。いたとしても可哀想だからってだけです。ああ可哀想なリーリナさん。救ってあげたい。……そんなものはいらないですよ」

「本当にそう言えるのでしょうか」

絶対的自信をもった声でハルトムートさんは言った。……なんで私がドキリとしているんでしょう。なんかの想いがこもってましたよね、今の。

そのままハルトムートさんは、入り口の方を向いて呼びかける。

「レスター將軍、いらっしやいますか？　こちらに来て頂きたいのです」

扉がぶち壊されて外が見えるようになっており、そこから外に立っている人が見える。その立っていた人がハルトムートさんに呼びかけられて、私達の方へやってきた。最初は歩いていく内にホールの照明に照らされて、はっきりとした姿が見えていく。

お、おおおお、ハルトムートさんとはまた違ったイケメンですね

！茶色の短髪に日本刀のごとき目付きでブラウンの瞳、すつきりした鼻立ちで引き締まった唇。体はがっしりとしていて、体当たりした程度じゃびくともしなそうです。藍色の適度に装飾された軍服がこれまた似合う人ですねっ！

数十年経つたらきつと、ダンディな人になるんじゃないでしょうか。素敵っ。あ、いえ、今も十分かつこいいんですけれども。

というか、この人がレスターさんなんですか。時々名前を聞いてはいたんですよ。国の保有する軍隊の総指揮を取られている方らしいです。実際見てみると貫禄がありますね……。でも25歳らしいんですよ、若い！

「ここに。ハルトムート様、俺にそのような態度でなくていいのですよ」

「それを言うのなら、貴方もですよレスター」

レスターさんがハルトムートさんに隣に来た。ハルトムートさんより少し背が高い。

にこーっと二人は笑いあっている。あ、何気にハルトムートさんが呼び捨てにしています！ ええと、雰囲気からしてお友達でもあるんでしょうか。

「一応職務中ですよ、ハルトムート様」

「そういうことしておきましょう。レスター。かねてからの願いが、叶う時が来ましたよ」

「こ、ここで、……ですか」

レスターさんは気まずそうな表情をして、視線を横へそらしている。そんなレスターさんをハルトムートさんはじっと見つめている。……どういふ図ですか。

やがてハルトムートさんの視線に耐えられなくなっただのか、大き

く息を吐いてから鋭い瞳でリーリナさんを見た。

「リーリナ」

「何をしに来たんですか。爵位が欲しくて私と婚約をすすめたあなたか」

「……えつと？　もしかしてリーリナさんの婚約者って、レスターさんなんですか？」

「な、なんて贅沢な！　レスターさんもかっこいい人なのに！」

「いや、人の好みがあるので、ひとえにそうとは言えないですけど、でもやつぱり、ねえ。」

「それに、レスターさんが爵位という地位欲しさに結婚するような人には見えません。逆にリーリナさんにはもったいない人だと思うんですよね。」

「リーリナさんの攻撃をもろともせず、レスターさんは話を続ける。」

「確かに俺は平民出身であるし、リーリナがそう思うのも当然だ。だが何度も言うように、俺がリーリナと結婚したい理由はそんなものではない。俺がリーリナを愛しているから結婚したいんだ」

「嘘。どうせ可哀想だからでしょ。愛してるだなんて信じられない」

「こんなに率直な愛の言葉を言っているのに、すっぱりと切ってしまっただなんて……！！」

「私だったらイチコロですね。あ、ここに来た時のハルトムートさんからの言葉は無効です。だって唐突すぎでしたから！」

「でもどうしてこんなにツンケンしているんでしょうか、リーリナさん。……はっ！　思い立ったら即質問！」

「あの、リーリナさん。そんな風に全部疑ってばかりだと疲れませんか？」

「疲れる？」

何を言っているの？ という具合の表情をしている。え、疲れませんか？ ずーっと眉間にしわ寄せてうんうん唸って自分にとって辛いことばかりって、疲れますよねえ。

ツンケンしているのだって、きっと疲れているからですよ！ 多分。

「そう、私、……疲れてる、疲れてるんですね。あは、はははは……馬鹿、みたい。こんなことに気がつかないなんて」

下に視線を落としながら喋るリーリナさんの顔は、今までの憑き物が全部落ちたかのようなものだった。あのピリピリとしたものはもう見当たらない。

一度両手で顔を覆って深呼吸したかと思うと、ゆっくり手のひらをどかしてレスターさんに向き合った。

「レスター様。今日は、ごめんなさい。けれど、また、また今度にお話をしませんか」

「……ああ、勿論だ」

レスターさんが晴れやかな笑顔を見せた。花が舞ってるんじゃないかってくらい幸せそうです。

んん、よく分からないけれども……、一件落着なんですかね？ 話が勝手に進んでいく……。

レスターさんはリーリナさんに近づいて腰に手を回し、ハルトムートさんに声をかけた。

「申し訳ありません、ハルトムート様。俺達はこれで」

「ええ。ゆっくり話し合って下さい。おって連絡します」

レスターさんは一礼して、リーリナさんと共に去っていった。それにしてもレスターさん、幸せ全開過ぎてキャラ崩壊しかけてませんでしたか？ まだレスターさんのことよくは知りませんけれど、第一印象がことごとく崩されましたよ。

「ミヤ、私達も帰りましょう」

ぼーっと眺めたままだった私に声がかけられた。

あ、そうですね！ 早く帰って寝ないとお肌が！！ お肌が！！ さっさと帰っちゃいましょう！

でも寝る前に、ハルトムートさんとお話しないといけませんね。

それまで頑張るのよ、私！！

十三話

馬車でガラゴロされながら、私の部屋に帰って来ました！ ああ…落ち着きますね。やっぱり自分の部屋が一番です。

フツカフカのベッドとかふわふわのソファとか装飾過剰のテーブルと椅子とかそんなに入れるものないよってくらい入るクローゼットや棚とかがあって、更に城下町が見下ろせる程高い位置にある部屋ですけど！

最初はやめてこんな高価なもの使えないってビビりまくりでしたが、今は逆にこれがいいです。これでいいんです。

背伸びをしていると、「では」と言ってハルトムートさんが出て行くことするので引き止める。駄目です駄目です話したいことがあるんですー！

なんとか引き止めて近くにある椅子に座ると、ハルトムートさんは机を挟んで反対側にある椅子に座った。

あ、マビアは部屋に帰ってきた途端、いつも通りの長々しい台詞を喋ったかと思うと出て行ってしまったんですよ。話していたことを要約すると、「準備があるのでこれで」。

一体何の準備する気なんでしょうか。ろくでもないことなのは確かです。でも触れられないのは仕方ないですよね！？ ね！？

さっさと消えてしまいましたし！ だから止められなかったのは仕方ない仕方ない……。その時はその時、今は今ということでは眠気が止まらないのをおして話すのよ、美夜！

ふーっと息を吐いてハルトムートさんに向きあう。その純粹な眼で真っ直ぐ見つめてくるのはむず痒いですってば。どうしてか後ろめたく感じるんですよ……。

うつうつ、早めに終わらせて寝ましようそつしましようー！

「ハルトムートさん、ごめんなさい！」

……え、何が？ って顔されました。いえいえいえいえ、思い当たる所沢山あるじゃないですか！

机を手のひらで思いつきり叩く。すみませんごめんなさい私が馬鹿でした自分でやって痛かったです。けど我慢！

「危険って事をよく分かっていなかったことです！ 仮に！ とはいえ婚約者ですし、周りの女性が恐ろしい人になっているのはわかりきっているのに、こんな馬鹿なことをしてしまって、私がもう少し危機感をもっていればよかったのに、えーっと、その、あの」

ええええーと纏まらない。言いたいことが纏まらない！ 似たようなことばかり言っていますよね……。

「とっ、ともかくですね、ハルトムートさんにご迷惑をおかけしてしまって申し訳ないです……」

本当にただでさえ迷惑をかけているのに、更に今回のことで負担をかけてしまって。もう、なんて私考えなしだったんでしょうか。反省してもしきれないです。

「ミヤが謝ることはないのですよ。確かにミヤには多少なりとも危機感を持って頂きたいと思います。しかし、元はといえばミヤを召喚した私が悪いのです。ミヤを召喚しなければ、私がしっかりとした対策をとれていれば、ミヤが危険な目にあうことはなかった」

召喚に関してはそうと言われればそうですけど、誘拐（？）に関しては絶対に私の危機感が足らなかったのが原因ですから！ そんな斜め下に視線を逸らして悲痛そうな顔をしないでくださいいい

い……！

「そんな根本的な話はいいんです！　今回は私が悪かったんですそれでいいんです！　終了！　だからですね、ハルトムートさんが謝ることはないですよ！」

私、譲る気ないですからね。明らかに私が悪いですから！

意味もなくふんぞり返っている、ハルトムートさんがしょぼんとした表情になっていました。何故？

「ミヤ」

「はい、なんででしょうか」

「ハルト、と呼んで下さるのではなかったのでしょうか……？」

そんな捨てられた子犬の寂しそうな目でこつちを見ないで下さい。……気にしていたのはそれなんですか！　ええ、約束しましたとも、晴人と呼ぶ約束を。ですけどもそんな気安く呼べませんよ！　なによりも周りの人からくる視線が気になるからです。例えばハルトムートさんに好意を寄せている女性でなくとも！

ハルトムートさんはこの国の王子様で勇者様でイケメンでかつこ良くって優しいときたら、誰だって注目しますよね？　そんな有名な人の名前を略して呼ぶだなんて……。

おおおおおおお恐多い。恐れすぎますよ。ハルトムートさんの婚約者というだけで注目が多いの、上乗せするような危険なことできません！　いくら自室に引きこもりがちでも、噂ってものがありますから……。

目立つことに関しては危機感ありますからね、なんてったって日本人ですから。下手に目立ちゃア釘打たれる！

後、この世界だと愛称・略称で呼ぶのは、恋人か伴侶くらいだっというじゃないですか。勉強したから知ってるんですよ！

ハルトムートさん分かってやっているんですか、どうなんですか！？と聞きたいところですけど、いや無理です。返ってくる反応怖い。

……うう。どうしろと。このまま見つめられ続けるのも辛いですし、ここは！

「あの、その、二人つきりの時だけ晴人さんって呼びます。他の人がいるときですと、私恥ずかしくて……！」

「それでも呼んで頂けるのならば、嬉しいです」

うわああああああキラキラオーラがっ、オーラが眩し過ぎて私消滅しちゃいます！滅せられる！……すごく、悪者な気分です。

自己嫌悪に浸っていると、ハルトムート……じゃなくて晴人さんが立ち上がった。

「では私はこれで。ミヤ、お休みなさい。よい夢を」

「はい、お休みなさいです。……晴人さん」

出ていく晴人さんを、立って見送る。

う、ううう、やっぱり恥ずかしいんですけども……。

そんなこんなで慌ただしい一日が終わりました。
いい加減危機感、持とう。

一話

「あんたがミヤか？」

「そうですね……、どちら様でしょうか」

動きやすい服装になって、訓練場でアディラさんとの地獄天国地獄な戦闘訓練をやり終えて地面にへたっていたら、男の人に話しかけられました。

青の髪を後ろに撫でつけていて、たれ目の細長い青の眼がよく見えます。どうやらこの兵士さんではないらしく、胸当てに黒を基調とした厚手の服を着ている。

いかにも旅の戦士って感じですね！ ただ顔の見た目だけでいくとナンパが得意そうなイケメンさんです。20代くらいでしょうか。普段はアディラさんが鬼神に迫った眼で私を見ているので、話しかけて来る人はハルトムー……晴人さんとマビアくらいなんですけど、今はアディラさん何処かに行ってしまったているんですね。だから話しかけられて少しびっくりしました。

先日の誘拐（？）事件以来私に誰かつくようになっていて、今はアディラさんがつくことになっていたんですけど……いいんでしょうか。まあ周りに兵士さんいますから大丈夫だとは思いますが……思いま……す。いや、流石にこんなところで何かあるとは思えません。

「俺の名前ダミアンって言うんだけど、お嬢ちゃん知らないかい？」
「う、ごめんなさい、知らないです」

ダミアンで脳内検索してみましたけど、該当なしでした！

最近は何んな人や物事を覚えようとして詰め込みすぎて、もしかしたら知っていたのに忘れて……という可能性はなきにしもあ

らずですが。でも本当に聞いた覚えありませんよ？

「ハルトムートから一言も聞いてないのか？」

ハルトム、晴人さんから？ 首をかしげてみましたが、頭から情報が出てくる気配はありません。

晴人さんから色々な話は聞きますけど、やっぱり聞いたことはないですごめんなさい。

私が知らないと分かると否や、ダミアンさんは軽く息を吐いて頭を掻きながら呟いた。

「おーおー、全く知らねえってことはあいつが薄情なのかどうなんだか」

「ハルトムートさんはそんな薄情な人ではないですよ！」

全くハルトムートさんが薄情なの想像できません！ 何事にも真剣に取り組む様子ならすぐに想像できます。

私がへたれている間にも、真面目にお仕事をやっているはずですから。立太子という、次の王様をやる人になる準備に向けて頑張っているんです。今はまだ王様の正式な養子に入っていないくて、その入る準備にも追われているとか。

ハルトムートさんのお手伝いをしたいところですけど、全然この世界のことを理解できていない私では邪魔になるだけですからね。

地道にやっていることを頑張るしかないって訳です！ だから訓練を頑張ってこんなにへたっているですよ……。あー、腕が痛い腰が痛い足が痛い。

「ん？ ああ、勿論分かってるさ。ただよ、どんだけ警戒してんだって話さ」

「警戒？」

腰に手を当てて、どこか遠いところを見ながらダミアンさんは言いました。

ハルトムートさんが警戒することありましたか？ 誘拐（？）事件はありましたけど、ダミアンさんが話しているのは違うことでしょうか。

私の知らないところですかあつたんでしょうかね？ ああ、益々不甲斐ないな私……。

「あー、うん。まっ、気にすんな！ 大した話じゃねえさ」
「はあ」

そうやって誤魔化されると余計に気になるものですよ、人間ってものは！

問いただしてしまおうとダミアンさんをずっと見続けていたら、見つめ返されたことと思うと突然失礼なことを言い始めました。

「しかし、ハルトムートが惚れたって聞いたからどんな美少女かと思つたら、案外普通の顔立ちしてんな」

そんな言われなくても分かっていること言わないでくれませんか。平凡な顔立ちだと自分で分かっているても傷つくものは傷つくんですよ！ 乙女心という純情がっ！！

ハルトムートさんと明らかに釣り合っていないのは分かっていますから！ これ以上私をいじめないで下さい、切実に。

いじけているとダミアンさんが慌てました。知りません、乙女心を分かっているような人は！ ナンパ得意そうだって思いましたけど、実は得意じゃありませんねあなた！

「あー、あー、ごめんごめん。機嫌直してくれよ、なっ？ えーっ

と、そうだ！ 俺はダミアン。ハルトムートにくつついで、魔王討伐をした槍の名手だ。よろしくな、救世主様」

「きゅ、救世主？」

いじけていたのをすっかり忘れる程の、衝撃的発言が出てきました。

一体なんですか、その盛大すぎる言葉は。私なにか救った覚えさっぱりありませんよ？

一話

救世主とは、絶望的な状況の最中、突如現れその場を打破していく人物。のことだと思っただけですけど。

それがどうやってたら私ってことになるんですか、教えてください
ダミアン先生！

「おう、教えてやるぜ我が生徒よ！ 分かっているとは思っただけ、ハルトムート異常なまでにモテるだろ？」

気を良くしたのかノリノリで答えてくれるダミアンさん素敵っ！
ええ、分かっておりますとも先生。散々実感しましたから！ モテるのは『絶対ハーレム』の呪いがあるからです。ハルトムートさんに出会っただけで恋に落ちてしまう恐怖の呪い！ たちが悪いっいたらありやしないもんです。幸い？ 既婚者にはきかないようですよ。

「女の子は全員ハルトムートに夢中。それで損するのは誰だと思っただけ？」

どこことなく疲れた表情で問題を出すダミアン先生。さっきまでのノリは何処へ行ったんですか先生！

えーっと、損？ 誰が損するんでしょうか。ハルトムートさんはある意味損してますよね！ あんなにもハルトムートさんのことが好きな人沢山いるのに、うっはうはができないんですから。ハルトムートさんの性格上、ありえませんが……。

駄目です、分かりませんダミアン先生！ この愚鈍なわたくしめ

にご教授願いますっ！

「正解はな、俺たち男が損するんだ」

幸せを口から逃す行為をする先生。駄目ですよため息をついては。幸せ逃げますよ！ え、もう逃げているってそんなことを言わないで下さい先生。幸せは歩いてこないなので自分で勝ち取りに行かないと駄目なんですから！

「いやいや、見事に歩いてきたさ。あんたが来たからな」

だからどうして私につながるんですか。男の人が損をする？ どういうことなんでしょうか。

んん、『絶対ハーレム』の呪いがある。女の人はハルトムートさんに夢中。ハルトムートさんはこのラムフォーラスでは愛する人を見つけれないから、困ってしまう。そして男の人達は損をしている。つまり、つまりー……。

「ダミアンッ！ アンタ勝手にほつつき歩いてるんじゃないよ！ あたしがわざわざ迎えに行っちゃったんだから大人しくしておきな
っ」

私がうんうん唸っていると、ポニーテールを揺らしながらプンスカ怒ったアディラさんが戻ってきた。アディラさん、ダミアンさんを迎えに行く為にいなくなったんですね、なる程なる程。でもダミアンさんが勝手にどこかへ行ってしまった、と。

簡単に連絡できる携帯電話とかないんですから、勝手にいなくなるのは大変じゃないですか！ それはいけませんよダミアンさん！

……ダミアンさん？

「あ、ああ、すまねえな。いやな、ハルトムートが惚れ込んだヤツ
つてのが気になってよ」

「そんなの他にも先にも変わんないだろう!? まったく、こいつ
が来てから調子狂ってばかりさ。ハルトムートは貧弱なこいつに
惚れ込んでいるし、気に食わないね! あたしにはハルトムートし
かないってのに」

親の敵っ! みたいな眼で私を見ないで下さい。多少は慣れまし
ただけど今日のは格別怖いです……。苛立っているからですね!

……それにしても、そういうことだったんですか。さっきまでは
よく分かりませんでしたけど、今のダミアンさんを見て分かりまし
た。ダミアンさんはアディラさんのこと好きなんですね! ハルト
ムートさんしかいないって言った時のダミアンさん、切なげとい
うか苦しそうというか……。

要するに、ハルトムートさんに女性たちは夢中。その女性に恋を
している男性は振り向いてもらえず損をする。だからもし、もしで
すよもし私とハルトムートさんが上手くいけば、女性達はハルトム
ートさんを諦めるかもしれないから、私が救世主と呼ばれる……で、
いいんでしょうか。

私の考えた通りだったら、かなりここの世界の男性は辛いことにな
ってますね。かといって女性が幸せかって言われたらそうではな
いでしょうけど。たった1つの呪いでこんなに大事になるだなんて
恐ろしすぎます。ますます私はハルトムートさんと結婚しないと世
界的にまずいよう、な。いや、でも、その、……ノーコメントで。

「あーっと、その、なっ! すまなかつたアディラ。とりあえず話
進めないか?」

「今度勝手な行動をしたら容赦しないよ!」

「分かってる、分かってるさ」

きつと尻にひかれるんでしょうけど、うまい具合に操りそうですねダミアンさん。普通にお似合いだと思います！

まだプンスカしてるものアディラさんを宥めたダミアンさんは、私の方を向いてサラっと言いつつ放った。

「あー、ともかく、だ。俺は今日からお嬢さんの護衛を務めることになった。よろしくな」

「は、はい、よろしくお願いします。……え？」

今度は護衛って何なんですか！？ 勘弁して下さいやめてください本当にこのパターン！

三話

「来てくれてありがとうございます、ダミアン」

「ハルトムートの頼みとありゃ、来るのは当然だろ？ 仲間だしな」

王子様になるつてのに椅子から立ち上がって俺なんかへ頭を下げるハルトムート。お前がそういう性格だとは分かってっけど、そろそろやめた方がいいと思うぞ。周りも煩くなってきたらうに。ゆくゆくはこの国を治める王様になるんだからよー。ま、俺も言葉遣い改めないといけねえけど。

「それにしても何の用だ？ まっ、なんとなく予想はついてるけどな」

ハルトムートの婚約者が誘拐される事件をきっかけに、ハルトムートは元から練っていた様々な対策を開始した。

人柄で誰でも話しかけやすいし、話したら話したで真面目に対応するハルトムートは、自分に寄ってくる女性をなかなか排除できなかった。そういった女性を排除する為にも、本当に必要ある時のみしかハルトムートに話しかけない、近づかないことにさせたのだ。今までの気さくさは失われるだろうが、威厳持つことができる。それに必要な事で話したくても話せない人間には、ハルトムートが気がつくからなあ。駄目な時は周りの人間に任せるんじゃないか？

んで、今度は婚約者周りをどうにかしようってところだろう。事情はよく知らねーが、婚約者様にはマビアがついているらしい。魔

王討伐の為に呼び出された災厄の魔女。何事にも興味を示さなかった魔女はハルトムートと出会った途端、恐ろしい愛を向けだした。あの愛を向けられるのだけは絶対に無理だ。本当にハルトムートはよく頑張ったと思う。

そんなマビアがハルトムートから婚約者様に執着を移したとか。

……アイツに執着されるって何したんだ婚約者。あれか？ 婚約者様は異世界から来たらしいから、異世界ならではのなんかやったのかねえ。ともあれマビアがついてるんじゃない心配になるのも分かるな。常に全力で何かしらしようとするし、思い立ったら一直線だし。マビアのことも頭に入れつつ、守るヤツが必要なんだろ。それで俺がいいんじゃないかと思って、俺を執務室に呼び出した。

俺の考えを伝えてみると、ハルトムートは苦笑いして答える。

「その通りです。すみません、ダミアンに迷惑をかけることになりました」

「いいんだよ！ 頼ってくれんの嬉しいんだぜ？ けどよ、どうしてまた俺なんだ？」

今までハルトムートが頑張ってきたんだ、今度は俺達が頑張らないとな。

ま、俺を頼ってくれるのは嬉しいんだが、俺でなくちゃいけない理由が分かんねえんだ。他にも適任はいるだろうしよ。

「利用するようで申し訳ないのですが……。ダミアン、貴方はアデイラが好きなのでしょうか？」

すまなそうに話すハルトムート。おい、流石に面と向かってそのことを話されると恥ずかしいぞ。

アデイラは俺と同じ村の出身で、所謂幼馴染ってやつだ。昔っから一緒に、遊ぶより戦闘訓練をしている方が多かった。跳ねっ返り

でそこらの男より男らしかったアディラを、俺はいつの間にか好きになってたんだよな……。おかしいよなあ、可愛くて小さな女の子がいいなあと思ってたのによ。

「あ、あー、まあ、な。そう、だけど。……それがどうしたよ？」
「私にも、余裕がないという事です」

神妙な顔してよく分からない呟きをした。どうということよ？ ハルトムートが余裕ないってこれまた珍しい。暫くは眼を伏せて黙然としていたが、腹をくくつたらしく話しました。

「私はこの世界の人を愛することができません」
「贅沢な悩みだわな。押し寄せられるぎるのも、大変なのはよく分かっているけどよ」

ハルトムートと一緒に旅してからよく分かった。女怖い。アディラで分かっているつもりになってた俺が馬鹿だった。マビア……は、ずば抜け過ぎてるからなんとも言えねえが、マビアに準じた女が迫ってくるのを俺は何度も目撃したのだ。あれじゃあハルトムートが女性を好きになれなくなるもの分かるけどよ、もしかしたら運命の人いるかもしれないのに、なにもこの世界の全員駄目だつてのはやりすぎだと思っぞ。

「しかしミヤは違います。ミヤは私以外の人を好きになることができる。私はそれが恐ろしいのです。もしミヤが私ではない誰かを好きになったとしても、私に止める権利はないのですから」

なんだこのハルトムート。弱気すぎる、誰だこいつ。いつものピバシ決めるハルトムートはどこに行つたんだよおい。けどそれだけ婚約者の『ミヤ』つてのを好きなんだな。恋は人を変えるって言

うが、正しくすぎる。慎重にもほどがあるだろ。権利云々気にしないでガツンといくのが男だろうが。

「はあー。んで、好きな人がいる俺がいいかなって思ったわけだ」
「はい、ダミアンは分かりやすいので……」

待て、そんなに俺はアディラのことが好きだと分かりやすい顔してんのか！？ どうなんだ！？ 勘弁してくれ、周りにただ漏れじやねえか……。

「最悪だ、俺今日から周りの目線がこえーわ」
「……すみません」
「まいいさ、バレてたことには変わんねえ。おーし、可哀想なハルトムート様に協力してやるよ！」

ハルトムートの兄さんとか、ハルトムートに群がる女性とか、ハルトムートの婚約者様がどうなのかとか、色々問題がありそうだしなあ。……ちよつと待てよ。兄さん？

「ハルトムート。まさかとは思うが、お前の兄さんはこの婚約について納得してんだらうな？」

ハルトムート、目線を逸らすな。逸らすんじゃないよ。あいつを後回しにしてどうすんだ！？ お前にとって一番厄介なヤツじゃないか！！ なんで放つといたんだ！

「できる限りのことはしたのです。しかし、兄上は魔王以上の強さを持っていらっしやる。とても私一人では……」

魔王以上の強さっておい。確かに手強いが、次元が違うだろう。

魔王は肉体的に、兄さんは精神的に。強さだけでやったら兄さんが圧倒的に勝つだろうけどな!?

「協力するとは言ったがよ、お前の兄さんに関しては俺は関わらないからな!」

「そう、ですか。ではミヤの戦闘訓練には付いていただかなくて結構ですよ?」

「おまつ、それは卑怯だぞ!? アディラがやってんだろそれ!？」

ええ、それが何かって顔すんな! く、くそつ……。ハルトムトこんな策略するヤツじゃなかったよな!? なかったよな!? それをさせるまでハルトムトを変えさせた婚約者、一体どんなのなんだ。ハルトムトが狂っちまうくらいの絶世の美少女か!? あー、頭いてえ。

「分かった、分かったよ。俺も協力する。それでいいだろ?」

「ありがとうございます、ダミアン。では明日、陽の暮れる前に訓練場前へお願いします」

お前のその、にこやかな笑顔を初めて憎いと思ったぞ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166t/>

このハーレム男がっ！！

2011年12月7日02時55分発行